

---

# ダメ男依存症候群

霧谷香住

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ダメ男依存症候群

### 【Nコード】

N6480B

### 【作者名】

霧谷香住

### 【あらすじ】

奈津美（二十三歳）の彼氏は、旬（十九歳）。だらしない性格の旬は、奈津美の理想とは正反対の『ダメ男』。年上女と年下男のラブストーリー。

## 1 彼氏

柏原奈津美（二十三歳・OL）の彼氏は、ダメ男。

「ちよつと……何よこれえ!?!」

散らかった部屋を見て、奈津美は叫ぶように言った。

マンションの一室、1Kの少し狭い部屋……そこはゴミ屋敷と化していた。

「あ、ナツ」

部屋の持ち主は、床に寝転がり、ビールの缶を持った手を奈津美に向けて振った。

これが奈津美の彼氏・沖田旬（十九歳・フリーター）。付き合ってから一年になる。

「ちよつと旬! 何でこんなに散らかってるのよ? 一昨日片付けたばっかでしょ!?!」

声をあげながら、奈津美はゴミ袋を片手に、そこらに散らかったティッシュやらカップ麺の容器やらビールの空き缶やらを分別し、片付け始めた。

奈津美がこの部屋にくると、毎回部屋の掃除から始める。それが習慣のようになっていた。

「もーっ! なんでゴミはゴミ箱に入れないのよ! いつも言うてるでしょ!」

部屋の中は足の踏み場がないほどにゴミが散らかっているというのに、本来それを納めるはずのゴミ箱は部屋の片隅に追いやられ、ほぼ空だ。

文句を言いながら奈津美は空き缶をゴミ袋にぶちこんだ。

毎回毎回、同じセリフを言って、同じようにピリピリして、こんな風に掃除なんてしたくない。……だったらしなければいいのかもしれないが、そういうわけにもいかない。片付けないと、本当に足の踏み場もなく、寛げるスペースなんてないのだから。

「全くもうっ……よくこんな所に寝てられるわね!」

床にそのまま寝転んでいる旬は、ゴミに埋もれるようになっていく。それで平気な旬の神経が奈津美にはよく分からなかった。

「あ、今日のナツ、パンツ黒」

旬がいつの間にか寝転がる向きを変えて奈津美のすぐ後ろからスカートの中を覗いていた。

「やだっ……ちょっと、もうっ! 旬!」

奈津美はスカートを押さえて旬から離れた。

「ナツってばやしー。あ、そのパンツって俺のため?」  
ケラケラと笑いながら旬は奈津美に言った。

「知らない!」

顔が赤くなっているのを隠すため、奈津美は旬に背中を向けて再

びゴミを拾う。

「ナツちゃん」

いきなり匂が後ろから抱きついてきた。

「きゃっ……！？ 何、匂！」

奈津美は驚いて声をあげた。

「しよ？」

甘えた声で、可愛く匂は言った。

もちろん、匂が言っていることは、その言い方とは正反対の、男と女の淫らな行為のことだ。

「えっ……」

そのことを分かっているため、奈津美は戸惑った。

「き……今日は会うだけでしょう！ 明日、会社だってあるんだし……」

次の日が休日の時は、そのまま泊まっていくことができるので許せるが、今日は平日。そういうわけにはいかない。それに今日来たのだから、昼間に匂から

『今日会いたい。会えない？』

と、メールがきて、少し悩んだ結果、

『ちょっとだけなら……会うだけね？』

という約束でだ。そういうつもりは全くない。

「匂っ……放して。今、掃除してるんだから」

耳元に匂の少し酒気の帯びた熱い吐息を受け、必死に流されまいと、匂の腕を解こうとする。

「ナツのパンツ見たら発情しちった」

匂はそう言って更に体をくっつけてきた。

「一回だけ……」

「ダメだつてば……あっ」

首筋に口付けられ、手が胸の膨らみをしっかりと掴み、奈津美は意識に反して甘い吐息を漏らしてしまった。

「ナツ……」

男らしく囁かれ、次の瞬間には匂の唇に奈津美の唇が塞がれてしまった。

それからは、主導権を匂に握られ、奈津美はただそれに従ってしまった。

やってしまった……

行為の後、ベッドの隣で奈津美を抱き締めるようにして寝息をたてている匂を見て、奈津美はため息に似た吐息を漏らした。

……結局、流されるままに二回目もしてしまった。そのつもりはなかった、と言っても、こういうことは今までに何回もあった。というか、毎回だ。平日にいきなり会うことになって、匂の家に来ると、必ずとっていいほどそのままお泊りコースになってしまう。

毎度毎度、今日は流されまいと、思っているのだが……手技、口技、寝技が得意な匂には、勝つことができない。

時計を見ると、午前二時過ぎだった。

今から帰っても、あまり眠ることはできないだろう。それに……

「ん……」

匂がもぞりと動いて奈津美の体を抱きしめ直した。起きたわけではなく、そうしたらすぐにまた気持ちよさそうに寝息をたて始める。

こんなふうにされたら、腕をほどいて勝手に帰れない。

惚れた弱味というやつなのか、彼氏が年下で、フリーターで金がなく、だらしなくて家が汚くて、こんな風にワガママに迫られ求められて……こんなダメ男でも、結局は許してしまうのだ。

「……あれ。ナツ、もう起きたの？」

翌朝、目を覚ました匂が、寝起きのかすれた声で言った。

奈津美は、着替えて、出勤のために化粧をしていた。

「だってもう七時よ。匂も起きなくていいの？」

奈津美は鏡に顔を近付け、アイシャドウを塗りながら、匂に言った。

「ん〜……今日バイト昼からだし、まだいい。だるいし」

そう言いながら枕に顔を埋めた。

「……そう」

奈津美は少し声を低くして言った。

だるいのは奈津美も同じだ。しかも、その原因は昨夜の匂の『攻め』のせいであるのに……。

フリーターである匂とは違って、正社員である奈津美は休んだり遅刻するわけにはいかない。別に悪気があるわけじゃないのは分かっているし、まさか匂本人には言えないが、こういうことを言われると癪に障る。

「あれ……ナツ、掃除したの？」

枕から顔を上げて部屋を見渡した匂が言った。

昨夜、掃除が中断され散らかったままだったはずなのに、今はもう綺麗に片付いてゴミ一つ落ちていない。

「うん」

奈津美はただ一つ頷いた。

今日、六時前に目覚めた奈津美は、そろそろ起きてシャワーでも浴びようかと体を起こし、ベッドから下りてゴミを踏んだ。そこで散らかった部屋を見てその状態に耐えられなくなった。そしてまだ

時間があるからと思って、シャワーを浴びて、それから部屋の掃除をしたのだ。

奈津美が神経質すぎるせいなのか、朝っぱらから掃除をこなしてしまった。疲労感は二倍だ。

「あ、朝ごはん作ったから、食べたかったら食べて」

台所には、ラップでくるんだサンドイッチが置いてある。旬の好きなハムとチーズのサンドだ。ちなみに皿に置かずラップでくるのであるのは、皿に置いて、それを旬がちゃんと洗って片付けるか分からないからだ。

「ちゃんとラップはゴミ箱に捨てるのよ？ 分かった？」

そこまで考えて、ここまで徹底的に言って、奈津美は本当に旬に甘いと、自分でも思う。

でも、年上として、母性本能が働くのか、自然と世話を焼いてしまっ。

「うん」

旬は返事をして、じっと口紅を塗る奈津美を見つめた。

「何？ 旬」

奈津美は視線に気付いて、ちらっと一瞬旬を見てから、また鏡に集中する。

「ん〜……女の人が口紅塗るところって色っぱいなあって思ってもナツのは他の人の三倍キレイ」

「もう……何言ってるの」  
呆れたように笑いながら、照れ臭くて奈津美の頬は少しピンク色に染まった。

「あ。ナツ、今日、チューしてないよ」  
匂は思い出したように言っただけで体を起こした。

「チューしよっ」  
全裸のままベッドから下りて奈津美のそばに寄ってくる。

「もう……リップ塗ってから言わないで」  
「一回だけ一回だけ」  
そう言つと匂は正面から奈津美を抱き締めて拒否される前に唇を合わせた。

一回だけ……ではあるが、時間をかけ、何度も何度も角度を変えて舌を絡めた濃厚な口付けだった。

やっと唇を離れた匂は、奈津美を堪能したことに満足気に笑っていた。

「もう……リップ塗り直さなきゃ」  
熱い口付けと抱擁の後でも必死に冷静を装い、出勤のために切り替えて鏡に向き直った。

「ナツ」

「ぎゃっ…」

旬が昨夜のように後ろから抱きついてきた。

「旬！ 離してっ。リップ塗れないでしょ！ ……やだ、ちよつと！ どこ触ってんの!?」

旬は奈津美の太股や腰周りを撫でるように触っていた。それは昨夜、ベッドの中でされた愛撫と同じようなものだった。

「ダメ！ あたし今から仕事なんだから……」

「触るだけっ」

そう言っ胸に手を伸ばした。

「やだっ……あっ」

「ナツのエッチっ。感度いいんだからなあ」

反応してしまった奈津美を見て、旬がニヤニヤと笑う。

「もっっ！ ふざけないで！」

奈津美は真っ赤になって口紅を持った手を振り、旬を引き剥がそうとした。

「あ……！」

勢い良く腕をふった拍子に、奈津美の手から口紅が落ちた。もちろんキャップをつけていない。

床に着地した口紅は見事に根元からポツキリと折れてしまった。

## 2 いい所

奈津美は何とかいつも通りの時間に出社し、ロッカールームに入ることができた。

「おはよう、奈津美」

先に来ていた同僚のカオルが制服の身だしなみを整えながら奈津美に声をかけた。

「おはよう」

奈津美も挨拶し返して、カオルの向かいの自分のロッカーの鍵を開けた。

「あれ？ 奈津美、昨日と服一緒じゃない？」

カオルに言われ、奈津美はぎくりとする。

「あ、また例の年下の彼氏君の家にお泊り？」

カオルがにんまりと笑って言った。

どうして女の勘というのはこうも鋭いのだろう。同じ女でありながら奈津美は思う。だが、奈津美の場合、これが初めてではないというのがあつてはれたのかもしれない。

「平日からよくやるわねえ」

明らかに面白がっている様子でカオルは言った。

「ま、仕事に支障が出ない程度にね」

そう言ってカオルは先にロッカールームを出て行った。

奈津美も急いで着がえようとロッカーの中にかけてある制服をとる。

女性社員は制服が義務づけられていて、普段は面倒にも思うのだが、こういう諸事情で二日連続同じ服の時は、ありがたく思う。私服やスーツの場合、まさか男の家から直行という理由で、二日連続で同じものを着るわけにもいくまい。

制服を着て、奈津美はロッカーの戸の裏についている鏡を見る。口紅が少しはげている。

その後、旬は何度も謝っていた。

「ナツごめん！ 本っ当ごめん！」  
さすがに自分がふざけたせいだと思っただらしい。オロオロと慌てながら、ただ謝った。

「もういいよ」  
そこまで謝っているのだから責める気もおきず、奈津美はそう言うてティッシュで折れた口紅を拾って床を拭いた。

「ごめん……」

奈津美の言い方がきつくなってしまうたのか、旬は俯いて呟いて、まるで捨てられた犬のように切ない表情になった。

「別に怒ってないから……もういいよ？ 私も注意してなかったし」  
奈津美は両手で旬の頬を挟み、顔を上げさせる。唇に奈津美の口紅がついていたのもティッシュで拭ってやる。

「じゃあ、行ってくるね」

顔をうんと近付け、軽く額と額を当ててそう言った。

「うん……行ってらっしゃい」

やっぱり少し切ない表情のまま、旬は奈津美を見送った。

あれじゃ相当怒ってると思われるかもしれない。いつもなら『何やってんの！？』ぐらい言うから、逆に。

しかし奈津美も急いでいたし、怒ろうという気になれなくてああ言ったのだが……

「そりゃアンタ、チューの一つでもさせてやればよかったんじゃない」

昼休み、社員食堂で今朝の出来事をカオルに話したら、そう返ってきた。

「いきなりそれ？」

「それが一番怒ってないって証明でしょ。それに相手だって喜ぶしカオルはあっさりと言う。」

「確かにそうだけど……」

カオルの言う通り、匂ならそれで一発で機嫌はよくなるだろう。

「でも匂の場合、調子に乗りそうだし……ていうかあのリップだって買ったばかりでお気に入りだったし」

「何、やっぱり怒ってたの？」

「まあ……少しはね。でもリップ一本で本気で怒るのも大人げないじゃない。まして年下に」

「ああ。確かにねえ……」

カオルは納得したように頷いた。

「それに……匂が調子に乗ったら……朝っぱらからシャレにならないし」

奈津美はそう言ってため息をついた。

「盛ってくんの？」

「盛ってくんの」

カオルの言葉の通りに、奈津美は頷いて答える。

「もう……たまにしんどくなる……年中発情期だし、頭の中にそれしかないんじゃないかってぐらい……」

「そりゃそうでしょ。まだ十代なんでしょ？ 体も心も性欲で一杯に決まってるじゃない」

「こともなげにカオルは言う。」

「でもいいじゃない？ ご無沙汰よりはそれぐらいで。セックスレスって結構深刻な問題よ？」

明らかに昼から社員食堂で話すような内容ではない。カオルはこ  
ういうところはサバサバしている。

「それは……確かに、まあ……」

男女間のそれについて、どれほどの影響があるか、奈津美も十分  
知っている。

奈津美が旬の前に付き合っていた男とは、それが原因で別れたよ  
うなものだ。

そして、それがきっかけで、旬と出会い、付き合い始めたのだけ  
ら……

「ていうか、アンタらの付き合いがきっかけが原因じゃないの？  
名前も知らないうちにホテル連れ込んでヤツちゃったんでしょ？  
しかも知らなかったとはいえ、未成年を」

「ちよつと！ 人聞き悪いこと言わないでよ！ 誘ったのは向こう  
なんだからね！」

際どい言い回しをするカオルに、奈津美は身を乗り出すようにし  
て言い返した。

「でも付いていったんでしょ？」

「それはっ……そうだけど……」

事実を言われ、奈津美の声は小さくなる。

「あゝ……もう。あたしって何で匂と付き合ってるんだろ……」  
そう言っただ津美はうなだれた。

「何、いきなり……」

「だって、よく考えたら匂って私の理想とは違うもん」

「奈津美の理想？　どんな？」

「年上で、落ち着いてて、誠実で、甘えられる人」

匂は、年下で、落ち着きがなくて、だらしなくて、いつも甘えてくる。全くの逆だ。

「でも甘えてくるのって可愛くない？」

そう言われて考えてみると、浮かんできたのは『ナツ』と言って飛び付いてくる匂だった。

「……可愛いって言えば可愛いかもしれないけど……どちらかと言えば、犬？」

それも奈津美が想像しているのは、発情期の、だ。ぴったりかもしれない。

「犬だったら十分可愛いじゃない」

「犬っていつでも雑種ね。血統書らしきところは何もないから」

自分で言っただ、匂の顔がどんどん犬らしく思えてくる。というか、

旬はもともとが犬っぽい顔をしていたかもしれない。

「血統書ねえ。彼氏君って浪人生？」

「ううん。現役で大学受験したけど、滑り止めも全部落ちて……でももう大学には行かないで働くつて。……まあ、まだ就職できてなくてバイトだけだけど」

言ってしまうえば……すなわち旬はお金も地位も名誉も……良くも悪くもない公立高卒で学歴すらない。

思えば思うほど、旬がダメ男に思えてくる。

「あ、ごめん」

ポケットの中の携帯がバイブの振動をし始めて、奈津美はそれを取り出した。

メールがきている。携帯を開いて操作し、開いてみると、旬からだった。

『ナツ』

今昼休み？俺は今からバイト

朝はホントごめん？

サンドイッチめちゃうかウマかったよ！さすがナツだな ありがとう  
とな！』

サンドイッチ一つで、ベタ誉めだ。それにしても、やっぱり、まだ怒ってると思われるのだろうか……

『どういたしまして』

朝のことは本当にもう怒ってないよ  
バイト頑張ってるね。ちゃんとしてくるんだよ?』

手早くそう打って、可愛い絵文字もふんだんに使って、すぐに返信した。

「彼氏君?」

カオルがにんまりと笑って聞いてきた。

「何で分かったの?」

「だってねえ……」

再び携帯が震える。早い。匂からだ。

『うん! ナツ最高!! 愛してる』

ハートマークを無駄に多く使っている。画面が真っ赤だ。匂が嬉しい時など、こういうメールが多い。奈津美はあれだけしかメールを返してないのに、単純だ。でも、分かりやすい。

「顔、ニヤけてる」

「え!?!」

カオルに指摘され、奈津美は画面から顔を上げた。

「その顔見たらすぐ分かるわよ」

そう言われて、奈津美は顔が赤くなるのを感じた。

これは、旬の唯一のいいところなのかもしれない。

旬は、普段の生活はあんなにもだらしないのに、マメなところがある。メールや電話は一日一回は旬からくれる。今朝のサンドイッチのことにように、些細なことでも誉めたり、お礼を言ったり……それに奈津美は『キュン』となる時がある。普段がああただけに、そのギャップがあるのだろうか。

奈津美は、旬のそういう部分にやられているというのも確かだったりする。

3 二人の始まり（前書き）

時は遡り、奈津美と旬の出会いの話です。

### 3 二人の始まり

約一年前……

奈津美はある居酒屋のカウンターで、一人で飲んでいたら、一人でビール、焼酎、日本酒のグラスを、少々無茶なペースで空けていた。

「お客さん……ちょっと飲みすぎじゃないですか？」

空いたグラスを下げながらそうやって奈津美に声をかけたのは、その居酒屋でバイトしていた旬だった。

「何。客に文句つける気!？」

その時の奈津美は荒んでいて、店員の旬を鋭く睨んだ。

「何よ。一人で飲んで淋しい女って思ったんでしょ」

そのへんの酔っ払い親父やヤンキーと何ら変わりなく、奈津美は旬にいちやもんをつけた。

「え……いや、そんなことは……」

「思ったんでしょ! 正直に言いなさいよ!」

「まあ……少しだけ……」

客に対して気を使っていた旬だったが、根が良くも悪くも素直な性格のため、詰め寄られて頷いてしまった。

「ちょっと座って!」

奈津美は旬の腕を無理矢理引っ張って隣に座らせた。

「あたしだって好きで一人で飲んでるんじゃないわよ。昨日、男と別れて、しかもこういう時に限って友達皆デートだし……飲まなきややってらんないっての！」

「はあ……」

こうして、閉店までの三時間、奈津美は名前も知らない男に愚痴をきかせてやったのだった。

これが、二人の出会い……

あの時は、おかしかった。

元彼と別れたことが、ショックだったと言うよりも、悔しかった。それを匂にぶつけていた。

「だって……一カ月ぐらい前から何もしてこなくなつたのよ？ 家に泊まりに行つても、夜、隣で寝てても『今日は疲れてるから』とか言つて相手してくれないのよ？ 何かおかしいって思うじゃない。だから昨日会つた時、最近冷たくない？ ってそれとなく言ったの。そしたらなんて言つたと思つ？」

「さあ……」

「『何か、君じゃ何も感じないんだよね。もしかして、不感症？』……はあ！？ 何好き勝手言つてんのよ！ こっちだってあんまり気持ちよくなかつたわよ！ でもそれはアンタが下手だからでしょ！』」

酔っていたせいで、普段女友達にも滅多にしない、かなりの下ネタ発言をしてしまった。

その時のことは、奈津美の記憶にも残っているのだが、その時はよっぽど頭にきていたらしい。理性が止めようともしていなかった。後になって思うと恥ずかしい。

「それ言ったの？」

それまで相づちだけを打っていた旬が、初めて口を挟んできた。

「言っていない」

「言えばよかったのに」

「言われた時はそこまで頭回らなかったのよ！ こういうのって後からくるからムカつくー！」

奈津美は怒りに任せて旬の腕を掴み、思いつきり揺さ振った。

「もうそれだけが心残りなの！ 絶対忘れられないわよ、あの男！」

「お客さん、そろそろ看板なんだけどね。そいつもそろそろ解放してやってくれないか」

カウンターから店長らしき中年男性が声をかけてきた。

後から聞いた話だと、旬はその日、バイトを上がる時間がもうとつくに過ぎていたらしい。それを奈津美が引き止めた形になってしまったのだ。

「悪かったな。今日の分、給料に上乘せしとくからよ」  
店長は匂にそう言っ、店の奥に消えて行っ。

「マジっすか？ やった〜儲け〜」

匂は、単純に喜んでい。

「んじゃ、お姉さん。お勘定……」

そう言っ、匂が立ち上がったが、奈津美は匂の腕を掴んだままだっ。

「……ない」

「え？」

小さく呟いた奈津美の音が聞き取れず、匂は、奈津美の顔の高さに屈んで、顔を覗き込んだ。奈津美は、不貞腐れたような表情をしてい。

「……帰りたくない」

「え〜……さすがにちょっとそれは困るっ、お姉さん……」

さすがに匂も、早く帰りたと思っ、奈津美の言葉に、苦笑いだった。

「だって……帰ったら一人で急に現実に戻されて……絶対に自己嫌悪しちゃうもん」

匂は、目を白黒させてい。

「だったら飲まなきゃいいのに」

この時、旬が言ったことは正しい。しかし、後になって、旬にまでそう言われてしまったという、少し情けない思い出に変わった。

でも、後からは『何であれぐらいのことで……』というものになっても、その時は本当にどうしようもないぐらいの気持ちだったのだ。

「分かってるわよ！　でも飲まなきゃやってらんないんだからしょうがないでしょ！」

そう吐き捨てるように言って、奈津美はグラスに少し残っていた焼酎を飲み干した。

「分かった」

旬がいきなり言って、奈津美は意味が分からず旬を見た。

「一人になりたくないなら、ホテル行く？　俺と……」

それが明らかに、少なからずも下心を含んだものだということは、酔って意識が混濁していた奈津美にも分かった。なのに、やっぱり理性が働かず、それよりもやっぱり一人が嫌という気持ちが勝ってしまった。

奈津美はその誘いに承諾しそのまま旬に付いていき、まだお互いの素性を何も知らぬまま、二人は男女の関係になった。奈津美にはその時の記憶は、全くない。

翌朝、奈津美はホテルのベッドの上で目を覚まし、見慣れない天井に、裸の自分、その隣に眠る裸の男を見て混乱した。

そしてすぐにその男も目を覚まし、

「ナツミさん、起きた？」

体を起こしながら言った。なぜか旬は奈津美の名前を知っていた。

「何で名前知ってるの……？ ていうか、誰？」

奈津美が必死にシーツで裸の体の前を隠しながらそう聞くと、

「ナツミさんから聞いてきたのに？ もしかして俺の名前覚えてないの？」

残念そうな顔をした旬に奈津美は黙って頷いた。

「……ていうか、私達……やっちゃったの？」

この、ベッドにそれらしき痕跡も残っている明らかな状況で、奈津美はそう聞いた。

「うん」

旬は、嬉しそうに頷いていた。

「すっげー良かったよ。ナツミさん、めちゃくちゃスタイルいいし、感度最高だし。不感性とか言った男、バカだなあ」

それを聞いて、顔が熱くなった。

そして、昨夜、酔って乱れて、居酒屋の店員に散々愚痴って、最

最終的にホテルに誘われたことを、今更になってやっと思い出した。

「ナツミさんも気持ち良さそうだったし、やっぱり下手だったんだよ。元彼と別れて正解じゃん」

「う……うめんなさい！」

意味もなく、奈津美は謝った。辺りを見回して、自分の服を探した。

「なんか酔って迷惑かけちゃって……」

ベッドの下の方に、バスローブを見付け、とりあえずそれを掴んで羽織った。

「り、料金は払うから……本当にごめんなさい！」  
そう言っただけでベッドから下りようとした。

「待って」

奈津美の手首を、匂が掴んで引き止めた。

「え……？」

奈津美はただ意味が分からず、混乱した。

「ナツミさん。俺と付き合って」

匂からの告白は、とても突然だった。

「えっ？」

奈津美は驚いた。目を見開いて匂を見ると、とても真剣な顔をしていた。

「順番逆になったけど……でもそのおかげで惚れたっていうか。だから俺と付き合って」

とても熱烈的な告白だった。しかし、奈津美はやっぱり困惑して固まってしまった。

「何言ってる……」

奈津美がそう呟くと、匂はその場に正座をし、頭を下げた。

「俺と付き合ってください！ お願いします」

全裸で土下座（下半身の大事な部分はシートで隠れていたが）……はたから見たら、あまりに滑稽な姿だ。奈津美にも、どうしたらいいのか分からない。

「ちよっ……やめてっ。顔上げて……」

狼狽えながら奈津美はそう言った。

「やだ。ナツミさんがいって言うまでこのままでいる」  
むちゃくちゃなことを言っていた。これには奈津美も焦った。

「そんなこと言われても……ねえ、とりあえず一回顔上げて？」  
そう言っただけ奈津美は肩を揺すったが、顔を上げようとは全くしない。

「ねえっば……ねえ、もういいから」

その言葉に、匂はすかさず顔を上げた。

「いいの？」

見開かれた目は、とても輝いていた。

「え……？」

奈津美の方が驚いた。

「あ！そういう意味じゃなくて……」

「やったー！！！」

奈津美の訂正を聞く前に、旬は奈津美に飛び付き抱き締め、そのまま押し倒した。

「きゃっ！ やだ……そうじゃなくて……っん！」

倒されて抵抗しながら、奈津美は言葉を紡ごうとしたが、旬の唇によってそれが阻まれた。

「すっげー嬉しい！ ナツミさんが俺の彼女になるなんて」  
唇を離して、奈津美を見下ろす旬は、言葉通りに嬉しそうで、少し可愛い感じの顔をして笑っていた。

奈津美は、その顔を見て、不覚にもドキツとしてしまい、何も言えなかった。

勿論、奈津美が『いい』と言ったのは、付き合っても『いい』という意味ではなく、気持ちは分かったからそんなことしなくて『いい』、という意味だ。

「あ、付き合うんだったらナツミさんってさん付けじゃなくていいか。ナツミ……ナツ。なあ、ナツって呼んでいい？」

なのに旬は、完全にいい意味で取って、うきうきと勝手に話を進め、そうやって聞いてくる。

「うん……」

奈津美は、頷いてしまった。

だが、この状況は、旬の表情は、奈津美にそれ以外の言葉を発するのを許していなかった。

「ナツ」

早速旬はそう呼んで、奈津美の唇、額、頬などに軽く音をたてて口付けていった。

それが、不思議と嫌ではなかった。

元彼が元彼だっただけに、飢えているのかもしれないと思った。

……まあ、なんとかなるだろう。

奈津美は流されながら、そう自分に言い聞かせて、旬と付き合うことにしたのだった。

この後、やっとまともに名前を聞き、年齢を聞いて自分より四つも下だということに驚いて（少し幼い顔立ちだったので年下だろうとは分かったが、身長があつてガタイがわりとしっかりしていたので、それも居酒屋でバイトをしていたので二十歳ぐらいだと思っていた）、職業柄も聞いて驚いて（その時はまだ卒業式を間近にした高校生だった。しかも、大学に落ちてフリーターが決定していた）、付き合い始めて暫くして、初めて行った旬の部屋の汚さ、生活のだらしなさに驚くことになるのだった。

#### 4 難しい彼氏

仕事の帰り、奈津美は家までの途中にあるドラッグストアに寄った。

新しい口紅を買ったためだ。しかし、折れてしまったのと同じ、奈津美が好きなブランドの欲しい色が無かった。仕方なく別のものを買って、奈津美は店を出た。

冬の夜の空気に、奈津美は白いため息をつく。

やっぱりショックだ。別に旬を責めるわけではない。責めてもしようがない。それは何度も思ってる。

思ってる時点で責めているようなものかもしれないが、絶対にそれを表に出すわけにはいかない。

少なくとも、旬の前では。

それは、年上としての意地と言ってもいい。

何となく、なのだが、奈津美には、年上なら年下に対して、寛容でないといけないという意識がある。年上なら、年下に対しては常に余裕を持って、冷静で、しっかりしていようと思っっている。

旬の前でも、一応は年上のしつかり者として振る舞っている。出会いが出会いなだけに、そうする必要なんてないのかもしれないが……

年上女と年下男の場合、付き合い方が難しいと奈津美は思う。年

下の男と付き合うのは、旬が初めてだ。だからよく分からない。

例えば、食事に行ったりした時なんかがそうだ。

会計の時、旬とだと、奈津美の方が多めに払うことが多い。旬は、男だからと払いたがるのだが、年下に奢らせるのは、何だか気が引けるのだ。

まだ旬がちゃんとした職に就いていたら別かもしれないが、フリーターで金欠の時が多い旬に払わせるわけにはいかない。

こんなこと、今までにはなかった。

今まで付き合った男は、同じ年か年上で、同じ年の場合は殆どが割り勘、誕生日とか特別な日だけは、奢ってもらう。年上だと、奢ってもらうのが当たり前という感じだ。

勿論、同じ年にしろ年上にしろ、奢ってもらう前提でいるわけではなく、まずは断るし、少なくとも少しは出そうとする。

それでも『今日は誕生日だから』とか『普通は男が払うもんだろ？』とかさりげなく言われたら、女の立場に甘えてしまえる。

ところが年下の……旬の場合そうできない。安心して、甘えることができない。

一度、旬と出掛けて、昼食にパスタの専門店に行った時のことだ。ファミレス並の安価だったので、二人合わせて二千円以下だった。これくらいだから、奈津美が全額払おうと伝票を持って、会計を済ませようとレジへと行くと……

「俺が払う」

と、いきなり旬が言いだした。

「いいよ、これくらいだし」

一応旬がそう言うのはいつものことなので、奈津美は軽くあしらった。

しかし旬は、

「これくらいだから俺が全部払う」

と、財布を出そうとする奈津美の手を押さえた。

「いってば。旬、お金ないんでしょ？」

いつも大体そうなので、奈津美はもう自分が払うつもりで旬の手を退けようとした。

「今日はあるよ。一昨日給料日だったから」

珍しく強く旬は言って、奈津美の手を離そうとしない。

「でも家賃とか払ったりしたらすぐなくなるって言ってたじゃない。気持ちはすごい嬉しいから。だから手、離して」

「やだ」

本当に珍しかった。旬がここまで強固な態度をとるなんてことは、あれが初めてだったんじゃないだろうか。

「……分かった。じゃあ旬の分だけ払って？ あたしも自分の分払うから」

無難に割り勘にしようとして、奈津美は旬にそう言った。

しかし、

「やだ。ナツの分も払う」

と、まるで我儘な子供のように旬は聞かなかった。

「…………だから旬の分だけでいいってば」

奈津美もここはとりあえず旬の言う通りにしておけばよかったのかもしれない。しかし、奈津美も奈津美で強情に首を縦に振らなかった。

「俺が払う」

「だからいいってば」

「あ、いいって言った」

「そっちのいいじゃない！ もうっ旬！」

子供のような言葉の応酬が続き、いい加減イライラしてきた奈津美は、キッと旬を睨んだ。

「……………ぷっ」

二人の目の前で、吹き出す音が聞こえた。

「あ、すっすいません！」

レジを担当していた若い女性の店員が、顔を真っ赤にして俯いた。その肩はふるえている。

無理もないだろう。目の前で、カップルがこんな馬鹿な言い争いをしていたら…………それも、男と女の立場が逆なのだから。

この店員も、客の手前、相当我慢して吹き出したのだろう。

奈津美は、顔から火が出る思いがした。

あれは今思い出しても恥ずかしい……

旬も、きっと彼氏としての自覚のようなものがあって、ああしたのだろう。それは本当に嬉しいのだが……もうちょっとさり気なくしてほしい。あんなに強情にならなくたって……

それは奈津美も同じだが。

よく考えたら、いくら相手が年下だからといって、あそこで素直に甘えられない女なんて、可愛いげがないのだろうか。というか、旬の前での自分は、可愛いげの『か』の字もないじゃないかと、今更になって奈津美は気付いた。

いつもピリピリして、小言を言って、気付けば『もうっ！』というのが奈津美の口癖になっている。

確かにこれが奈津美の気性ではあるが、男の前でこれはないだろう。せめてもう少し、作ってでも可愛いところを見せるのが普通じゃないだろうか……

どうして旬は、こんなに可愛いげのない自分と付き合っているのだろう……

考えていると、そんな疑問が湧いてくる。

「ナツちゃんっ」

突然、そんな聞き覚えのある声がして、後ろから何かのしかかっ

てくるような衝撃を受けた。

こんなことをするのは奴しかない。それにこの声……

「匂！？」

「当たり前」

「ご機嫌な声が返ってくる。顔を横に向けると、すぐ横に匂の顔がある。」

「もうっ……匂！」

早速口癖が出てくる。それに対し、匂はへへっとしまりのない顔で笑った。

「ナツツ。こんなところで会うとか嬉しい」

匂はそう言っ、奈津美を後ろから抱き締める。もし本当に匂が犬なら、千切れんばかりに尻尾を振っているに違いない。

「もうっ……恥ずかしいから離して」

奈津美はそう言っ、体に巻き付く匂の腕をほどいた。

勿論、ここは街中で、人の目も多い。皆ちらちらと二人の方を見ている。

「匂……誰か確認しないでいきなり飛び付くのはやめてっいつも言ってるでしょ。間違ったら変質者になるじゃない」

そう……こういっことも初めてではない。

匂は、所構わず、奈津美を見つけると、それこそ犬のように飛び

付いてくるし、しかも奈津美を驚かすためと、まず声をかけるとか、確認をしようとししない。

「俺がナツのこと間違えるわけないじゃ〜ん」

旬はいつも笑顔でそう言うが、他では本当に間違えたことがないのか、不安になる。

「ナツ、何してんの？ 帰るところ？」

「うん。旬は？」

「俺はバイト。途中まで一緒に行こっ」

旬は奈津美の返事を聞く前に、奈津美の手をとった。

「うわっ。ナツ、手え冷た！」

旬が驚いたように言っつて、奈津美の冷えた指先を握った。

「じゃあ……」

旬は奈津美の指を絡めて手を繋ぎ、その手を自分のダウンジャケットのポケットの中に入れた。

「これでよし！ あったかい？」

旬が奈津美にそう聞いてきた。

「うん……あったかい」

奈津美は素直に頷いた。旬は、それを見て、満足そうに笑った。

本当に、暖かい。旬の手の熱が、奈津美の冷えた手に伝わってくる。ポケットの中も、旬の熱が籠もっていて、奈津美の手全体が旬

の温もりに包まれているみたいだ。

こういう、カップルだと当たり前、ということが、奈津美は好きだった。学生時代に学生同士だったら当たり前にしていたけれど、社会人になっただらなぜかそういうことをしなくなつた。

多分周りの目も気になつて、互いに気恥ずかしいというのがあつたからだろう。

でも、旬との場合は違つた。むしろ、旬がそういうことをしたがる。

そういえば、パスタ屋での出来事が原因で、それを知つた。

「もうっ！ 旬のせいですごく恥ずかしかつた！」

パスタ屋を出て、二人は街中を歩きながら話していた。というか、奈津美が例の如くピリピリとしていた。

結局、あの場は奈津美がさつさと会計を済まし、逃げるように店を出た。他の客もかなり注目していたらしく、笑い声が聞こえた。

こんなに恥ずかしい思いをしたのは、本当に初めてだった。もうあの店には行けない。そう思っていた。

旬を見ると、不機嫌そうな顔をしている。なぜだか全く分からなかつた。

「……旬。そんなに払いたかつたの？」

この時は本当に、幼稚園児かと思った。何でこれぐらいのことでこんな喧嘩したような空気になるのか……

「ナツ。俺ってナツの彼氏だよな？」

いきなり旬はそんなことを言いだした。

「何言ってるの？ そうじゃないの？」

というか、旬が勝手にそういうことにしたからじゃないのか。そう思いながら奈津美は言い返した。

「だって……何か違うじゃん。メシとか、いつつもナツが当たり前のように払うし」

その言葉に奈津美は目を丸くした。

「確かに、俺、金ないけどさ。さっきみたいに俺が出すって言うても、断って、ナツが払っちゃうし。……それに、デートの時、手も繋いでくれないし。今も俺側の手で鞆持ってるし」

「えっ……」

言われてみて、奈津美は確かに、そうだと気付いた。

今まで、何回かデートしたが、本当に一緒に出掛けて並んで歩くだけで、特に何ということはなかった。しかし、ここ何年かの奈津美にとっては、それが当たり前になっていた。

「ナツって、そういうの嫌いななの？」

旬のその言い方は、少し寂しそうだった。

「えっ……あ、別にそういうわけじゃ……今までそういう習慣なかったから……」

「そういうことを言うのは気恥ずかしくて、奈津美は少し下を向いた。」

「……嫌ってわけじゃない？」

旬は奈津美のことを覗き込むようにして聞く。

「うん」

奈津美は小さく頷いた。

「じゃ、繋ご？」

旬はそう言って手を差し出した。

奈津美は、黙って、少し緊張しながら旬の手を、ぎこちなく握った。

「へへっ」

旬は、これだけで、さっきまでの不機嫌そうな表情と打って変わって、とても嬉しそうな顔をして笑い、奈津美の手を握り返し、指を絡めた。

奈津美も、これだけのことだというのに、嬉しかった。久しぶりだったからだろうか、まるで初めて付き合った人と初めて手を繋いだ時のように、胸がときめいていた。

「こういうのっていいな。と、初めてしみじみと感じていた。」

思えば、旬と付き合い始めて、そういう純粹で素朴な恋愛も味わっている気がする。

やっぱり、旬が自分より若いからなのだろうか。そう思うと、奈津美は自分が急に老けたように思える。

「旬、今からどこのバイト？」

自分のネガティブな思考を、奈津美は何かを話すことで誤魔化す。

「居酒屋だよ。」

「……居酒屋って、あの？」

「そう。あの」

旬は、ニヤッと笑う。

それを見て、奈津美は話題を間違えたと後悔する。

旬が今から向かうバイト先は、約一年前、二人が出会った居酒屋だ。

「まだ続けてたの？」

「うん。あそこ時給わりといいし。店長も気前いいし。あ、ナツのこと今度連れてこいって言ってたよ。ナツ、全然行ってないんだろ？」

「当たり前でしょ！ 恥ずかしくて行けるわけないじゃない！」

あの居酒屋は、ナツの自宅のすぐ近くなので、わりと頻繁に行っていたのだが、あの日以来、一度も行っていない。

「ていうか、店長、あたしたちのこと知ってるの？」

「うん。だって俺、言ったし」

「も……言わなくていいのに」  
奈津美は顔を赤くして言った。

「あ。そーだ。今度行ったらさ、また帰りホテル行く？」  
旬はニツと笑って言った。

「もう！ 何言ってるの！ あたしは行かないからね！ ていうか、あの時のことは忘れてっば」

「普通彼女との初めてのエッチのこと忘れられるわけないじゃん？ ナツは忘れてるみたいだけどさあ」

「もう！ 旬！」

街中で普通に変なことを口にしたことと、その内容に対して、奈津美は更に顔を赤くして旬をキツと睨む。

「本当、あん時のナツ可愛かったなあ」

旬のその発言に、奈津美は目を丸くした。

「あ、今もめちゃくちゃ可愛いけど。つうか、ナツはいつでも何しても可愛い」

そう言って、奈津美に笑顔を向ける。

「どこが？」

無意識に奈津美は聞いていた。

「具体的に、どこが？」

旬の感覚はおかしいと思う。旬といえる時の自分は、一番可愛くないはずなのに。そもそも、そんな自分と付き合っている時点でおかしいのか……

「え〜……そんなの恥ずかしくて言えないって」

旬は、照れたように頭を掻いた。

「いいじゃん。何でも！ 何がしろ、俺がナツのこと好きなのは変わんねえもん」

旬の顔が、少し赤い。奈津美もつられて顔を赤くした。

多分、こんな自分を好きだという旬は、相当な物好きだと、奈津美は思った。

そしてそれは、そんな物好きと付き合っている、奈津美も同じだ。

## 5 理想と現実

とある居酒屋で、奈津美は飲んでいた。

居酒屋、と言っても勿論、旬のバイト先ではなく、流行の小洒落た居酒屋だ。それに、今日はカオルと一緒に。

「ごめんねー。付き合わせて」

酎ハイで乾杯をした後、カオルが言った。

「いいよ。全然。暇だったから。それよりよかったね。早めに決まってる」

「うん」

奈津美の言葉にカオルがにっこりと笑う。

今日は、カオルの買い物に付き合った。カオルの彼氏に渡すチョコレートを選ぶためだ。もうすぐくる、バレンタインデーのために。

「そつえば、奈津美は買わなくてよかったの？ あ、もう用意してるの？」

唐揚げを箸で摘みながらカオルが尋ねた。

「ううん。旬には作る予定だから」

そう答えて奈津美は酎ハイを一口飲んだ。

「へー。手作り。やるわね」

カオルは感心したように奈津美を見た。

「だって、旬にあんな高級なものあげてもすぐなくなるもん。質よ

り量だから満足しないだろうし」

奈津美とカオルが今日行ってきたのは、有名な高級ブランドのチョコレート専門店だ。小さな一粒が何百円という、高価なものだ。カオルも、一箱六粒なのに五千円という、信じられないほど高額なものを選んだ。

「こんなに高いの買うの？」

と、奈津美が目を丸くして言うと、

「彼、あんまり甘いもの好きじゃないし、一カ月後には倍以上になって返ってくるから、安いもんよ」

と、カオルは笑った。

つまり、ホワイトデーのお返しが豪華だから、これぐらいの出費は痛くない。そういうわけだ。

カオルの彼氏は、年上で国立大卒、一流企業のエリート社員……高学歴、高収入の男だ。ちなみに顔もなかなか男前だ。

「何作んの？」

「チョコレートケーキ。旬、ケーキ好きだから」

カオルに聞かれて、奈津美はそう答えた。

「ケーキって……ホールで？」

カオルは、まさか、という顔をする。

「うん。匂ってケーキ好きっていうか、甘いものが大好きなの。匂いの誕生日も、ケーキ食べたっていうから作ったんだけどね、流石にホールでは作りすぎたかなあって思ったら、殆ど一人で完食しちゃったの」

「一人で？」

カオルは目を丸くしている。

「そう。しかもそれで平気だし。もう、見てる方が気分悪くなったわよ。……ケーキバイキングとか行く時、誰よりも目が輝いてるし、ちょっと恥ずかしいくらい」

その時のことを思い出して、奈津美はため息混じりに言った。

「へー……ケーキバイキングとか行くの」

カオルは何故かそっちの方に食い付いた。

「まあ、たまにね。匂が行きたがるから」

「いいなあ。あたしもそういうデートしてみたい」

カオルは、本当に羨ましそうに言う。

「え、何で？」

奈津美にはカオルの気持ちから分らず、聞き返す。

「だって楽しそう。そういう所ってさ、一緒に入っていい男と良くない男いるじゃない」

まあ確かに、と奈津美は思った。

ただでさえそういう店は女性客が多いわけだし、奈津美達のように

にカップルもいるにはいるが、正直、男は浮く。カオルの彼氏は明らかにそうだろう。というか、そもそもケーキバイキングとか、そういうものが似合わないような、大人だ。

「でも旬と行くのは、あんまりお金ないからだもん。カオル、贅沢だよ」

確かに旬は、男のくせにそういう店に溶け込んでいるが、それが彼氏としていいのかは別だ。

「奈津美だって贅沢でしょ。ていうか、何だかんだで彼氏君の話ばっかしてるし」

「そっそんなことないし！」  
カオルに指摘され、奈津美は顔を真っ赤にしてしまった。

「で？ 十四日はお泊まりなの？」  
カオルはにんまりと笑い、興味の方向を変える。

「泊まらないから。平日だから、会って渡すだけ」  
奈津美はそう言ってクールに返す。

「えー。つまんない」

「つまんないって……あたしは娯楽？」  
唇を尖らすカオルに、奈津美は呆れたように返した。

「だっておもしろいから。彼氏君の話」

おもしろいと言われても、あまり誉められたような心地がしない。

「ていうか、そういうカオルこそどうなの？ 十四日、会ってお泊まりしないの？」

いつも人のことは聞くくせに、自分のことは言わないカオルに、今日は奈津美が突っ込んでみる。

「だってあたしは会わないもん。十四日に」  
カオルからはあっさりそう返ってきた。

「彼、十四日に急な出張入っちゃったから、その日は会えないの。ま、代わりに週末はそれなりに楽しむけどね」

ふふつとカオルは何か含みのある笑い方をする。  
それは、大人の時間を楽しむ、という意味らしい。

「あゝあ。本当、いいなあ」

奈津美は溜め息をついて、再度そう言った。

実は、奈津美の元カレとカオルの彼氏との出会いは、同じだったりする。

一年半ほど前、カオルの知り合いか何かのツテで、その二人が勤めている会社の男前男性社員との合コンに行つて知り合った。

向こうも二人が友人同士らしく、始めは四人で話していたのだが、暫くして、片方（カオルの今の彼氏）がカオルのことを気に入り、カオルもまんざらじゃないという感じで仲良く話しだした。仕方なく、奈津美はもう片方（奈津美の元彼）と話していて、まあ何とか打ち解けてきた頃、カオル達は付き合うことになっていて、じゃあ俺らも付き合おうか、と言われて奈津美達も付き合い始めた。

そして、奈津美らは一年前に別れたがカオル達はまだ順調に続いている。

この差は一体なんだろうか。その場の雰囲気で付き合い始めたせいでだろうか。貧乏くじを引かされてしまった気分だ。

「でも奈津美、何だかんだ言いながら長いこと付き合ってるじゃない。それはやっぱり奈津美も彼氏君のことが好きだからでしょ？」

「まあ……そうなのかな」

そう言えば、前の彼氏は、一応奈津美の理想通りだった。年上だったし、落ち着いた雰囲気だったし、別れの発端となったことがあった以外は基本的に誠実だったし……少なくとも、奢る奢らないで言い争うようなことは一度も無かった。……なのに付き合ったのは半年も経たないくらいだった。

旬とは……何だかんだで一年続いている。実はこれは、今までの奈津美の恋愛遍歴の中で、一番長い。

これには、奈津美自身驚いている。そして疑問だ。

「奈津美。理想と現実の違いだよ。理想の人間が自分に合う人間かは違うからね」

カオルが、諭すようにそんなことを言った。

ということとは、旬は自分に合う人間だということか……こんなに文句がでるのに。

不思議な話だ。

「そっいやシユンってさー」

不意に耳に入った言葉に、奈津美はピクリと反応して、隣を向いた。

「どうしたの？」

奈津美の動きに、カオルが尋ねた。

「あ……ううん。なんか旬の名前が聞こえた気がして……」  
奈津美がそう答えると、カオルがいつものようににんまりと笑った。

「へえー。自分の彼氏のことだったら耳聴いわねえ」

「そっそんなわけじゃないわよっ。それに多分、聞き間違いだしっ！」

奈津美は慌てて否定した。

本当に、思わず反応してしまったことが恥ずかしい。『シユン』なんて別に珍しい名前ではないのに……

「シユンってどこのシユンだ？」

「オキタだよ、オキタシユン」

隣からの声を聞き、奈津美は固まる。旬と同じ名前だ。

「旬かも……」

「え？ 居るの？」  
カオルが隣を向く。

「うっん……」

この店は、一つのテーブルごとに衝立てのようなもので仕切られている。座った時の頭の高さほどのそれを、奈津美は背筋を伸ばしてそっと隣を覗いた。

奈津美の座高ではあまり見えないが、向こうが男三人ということが分かった。背の高い、それぞれ違う種類の茶髪の頭が三つ見える。

「旬の知り合い……っばい」

髪型の感じや、先程聞いた声で、旬とそれほど年が変わらないだろうと奈津美は推測した。

「ああ。旬なら最近会ったぞ」  
三人のうちの一人が言った。

奈津美は、そして野次馬根性を働かせたカオルまで、衝立ての方に耳を寄せている。まさに壁に耳、という状態だ。

「マジ？ どこで？」

「あいつの家。俺、高三の時にシュンにCD貸してさ、それが無いと思ってたらあいつ、返すの忘れてたとか言っつてこの間メールよこしたんだ」

「あー…シュンのヤツ、そのへんいい加減だよなあ。漫画とかすぐに返ってきた試しないぞ」

……ちよっと、旬らしいという影が見えてきた。

「あいつの部屋マジで汚ねえから、貸したもんは大概あいつの部屋に埋もれるんだよな」

「旬だ」

奈津美は小さく呟く。『部屋が汚い』で確信した。

この辺りの二十歳前後の男で、貸したものが返ってこないようないい加減さで、物が埋もれるほど部屋が汚いオキタシユンは、奈津美の彼氏の旬しかない。

「つつか、その旬が一人暮らし始めてさ」

「旬があ!?!」

「うわ〜……あいつ一人で汚してそう」

ええ。いつも一人で有り得ないくらい汚してますから。……と、驚いている旬の友人達に対し、奈津美は心の中で同意する。

「それがさ、行ってみたら普通だったんだよ。むしろ綺麗にしてあってさ」

「マジで!?! あいつ掃除できんの?」

「俺もそう思ってたマメに掃除とかしてんのかって聞いたらさ、彼女がしてくれるんだって」

「彼女お!?!」

どうやら、話が奈津美のことになったらしい。それにしてもかなりの驚かれようだ。

「彼女って、ミキ?」

「ミキ……?」

女の名前らしきものに奈津美は反応する。

「違う違う。ミキのすぐ後」

「ミキとは別れたんだろ？ 旬が大学全部落ちたのが原因で別れたって聞いたぞ」

「マジで？ 何だそれ」

本当に何それ……と、奈津美はまたもや内心で突っ込む。

ミキ、とは元彼女のことらしい。旬からはそんな話が出ないから知らなかった。出ないのが普通なのであるうが。

それにしても、大学不合格が原因って……

「で、新しい彼女ってどんなんだ？」

奈津美の思考はさておいて、隣の話は旬の彼女、奈津美のことになる。

「それが年上なんだとよ。俺らの四つ上のOL」

「はあ！？ 今度は年上かよ」

「しかも旬好みのボンツ、キュツ、ボンツ。推定で上から90・59・86のEカップ」

「マジで!?!」

何で知ってるの!?!

思わず飛び出しそうになるぐらい奈津美は驚いた。

奈津美は、実は中々グラマラスな体型をしている。腹や太股、二の腕などはすつきりしてるのだが、胸や尻には、その分の脂肪が悩ましいつき方をしている。

街に出ると、男が振り返って見るし（奈津美に自覚はないが）、社内ではセクハラの対象にされる（もう何とかやり過ぎしているが）。それぐらいの魅力的な体をしている。

それはともかく、何で旬は、本人だって正確には知らない奈津美のスリーサイズを、ほぼピッタリ当ててしまったのだ。確かに、しよっちゅう見て触ってはいるが……

ていうか何でそれを友達とかに言うのよ！  
奈津美の顔は恥ずかしさで赤くなる。

「あのオツパイ星人、昔からそこしか見てねえよな。付き合う子みんな胸でかかったし」  
呆れたような声で言われている。

『オツパイ星人』  
旬に対してその表現は、妙にしっくりきた。もし旬が彼氏じゃなければ、笑える。現に目の前ではカオルが笑っている。

「でも今回はすっげーその彼女のこと絶賛してたぞ。『あのオツパイはマジですごいって！ 神様の芸術品……いや、つつか、あれ自体が神様……オツパイの神様そのものだって！』って意味の分からんことをかなり興奮して熱弁してたから」

この彼の口調も、呆れていた。

それを聞いた奈津美とカオルは顔が真っ赤になっていた。

奈津美は恥ずかしさと旬への怒りからだだったが、カオルのは声に出して思い切り笑いたいのを堪えているためだ。

「オ、オツパイの神様……ぷふっ……やっぱり奈津美の彼氏君、最高。お、面白すぎ……くっ」

カオルは必死に笑いを堪えて涙目になりながら奈津美を見る。

「カオル……」

奈津美は恨みがましくカオルのことを軽く睨んだ。

「ご……ごめんって……」

カオルはそう謝るが相当ツボに入ったらしく、それも堪えようとすることで逆にひどくなっている。

「顔見てみたいな、その彼女」

「写メとが見たか？」

「いや、撮ろうとすると嫌がるからないってさ」

拒否してよかった……と、奈津美は心から思った。実はこんなにすぐ隣にいるなんて、写メを見られていたらすぐにバレていたかもしれない。

「でもかなり美人で可愛いつて。あいつ、本っ当デレデレしながら彼女のこと話しててさ、料理できるし掃除できるし洗濯できるし、あんなにいい彼女他にはいないって嬉しそうにノロけてた」

その言葉は、奈津美には純粹に嬉しかった。顔は赤いままだったけれど、それは恥ずかしいというより、照れ臭い感じだ。

「へー。でも、匂とOLなんてどういう繋がりあったんだ？」

一人のそんな疑問に、奈津美のちよっといいい気分は吹っ飛ぶ。

旬！ まさかあのことまで友達に言っていないでしょうね！？

もし言っていたら、本当に別れてやると、少し本気で考えた。

「それは聞いたけど言わなかったな。『んなの勿体なくて言えるかよ』ってキモいぐらいにデレデレしてたから、聞く気失せた」

ホッと奈津美は胸を撫で下ろす。

よかった……言わなかった理由は意味分かんないけど。

「……何だそれ。つつか旬のヤツ、あんなのくせに何でそんなにモテるんだよ。しかも皆いい女だし」

……モテるんだ。しかも皆いい女……

繰り返すように奈津美は心の中で言う。

まあ、旬はどちらかと言えば可愛い系の整った顔で、黙ってればいい男の部類だ。本当、口を開かず黙って立っていれば。

「その彼女も何がよくて付き合ってたんだろうな」

それは聞かないでほしい。（別に聞かれてはいないが）  
奈津美にもよく分からないのだから。

「そつだよな。浪人生に魅力なんて感じるか？」

普通は感じないよね……って、浪人生？

「旬のヤツ、浪人じゃないぞ。大学全部落ちて、専門（学校）行くつもりだったけど、それもやめたんだと」

「そうなのか？ 聞いてねー」

「で、今何してんの」

「まだ仕事決まってるからとりあえずバイト生活だった」

「ふーん。……あいつ、働くとかできるのかよ」

友人にも心配されている。奈津美も心から不安だ。旬は、ちゃんと就職できるのか……

「つつか、あいつ働く気ないんじゃないの？」

その言葉に反応して、奈津美は見えないと分かっているのに、顔ごと隣を向く。

「彼女がOLってことはそれなりに稼いでるんだろ？ しかも料理も掃除も洗濯もできるってことは身の回りのことは全部してくれるわけで、最悪何もしなくても食っていけるじゃん」

「あー。確かに。まさかあいつそれで付き合ってるのか？」

「だとしたら最悪だな」

三人とも冗談ばく軽い言い方で、笑い飛ばしていた。

そのあとの三人の会話は、奈津美には聞こえていなかった。

「 奈津美」

「えっ……」

カオルに声をかけられ、奈津美は我に返った。

「顔、死んでる」

「え……」

箸で奈津美のことを指され、奈津美は半ば無意識に頬に手をあてた。

「気にしちゃだめよ。本気で言ってることじゃないんだし、まして本当のことじゃないんだから」

カオルが、はっきりと奈津美に言い聞かせるように言った。

「……うん」

奈津美は、小さく頷いた。

## 6 疑問と不安

奈津美は、帰り道、一人悶々としていた。

あんな話を聞いたら、嫌でも考えてしまう。

自分は、旬にとってただ都合のいい女なのだろうか。

カオルにああ言われたし、奈津美だってそう思う。……思いたい。だけど、あの話はやけに説得力があつて、そんなことない、と否定しきれない。

そう思うと、最悪だ……と、自己嫌悪に陥る。

他の人間の話を聞いただけで、自分の彼氏をそういう風に思うなんて……

旬がそんな風に思っているはずないじゃないか。

旬は、素直な性格だし、嘘をついたらすぐ分かる。というより、元から嘘を吐いたりなんてしない。そういう人間が、他人をいいように使うなんてこと、できるはずがない。

大体、旬は甘えてばかりというわけではない。相変わらずデートの時に割勘を嫌がつて払いたがつているし、別に何もせずに食わせて貰おうという意識はないはずだ。……未だに奢れるほどの懐は持ち合わせていないが、それはこの際どうでもいい。

何だか、そう考えるとだんだんポジティブになってきた。

そうだ。それに、旬は奈津美のことを嬉しそうに話してたと言っ

ていたではないか。……主にスタイルを。

旬は女性の胸が好きらしい。いつも抱きついてくる時は胸を触らし、二人きりの時は『ナツのオツパイ〜イ』と嬉しそうに言いながら顔を埋めている。

いつだったかは、ある童謡の替え歌で変な歌を作っていた。

ナツのオツパイいいオツパイ・すごいぞ〜すごいぞ〜  
巨だ〜いマシユマロできていゝ・でかいぞ〜でかいぞ〜

……カオルなんか聞いたら爆笑だったんじゃないだろうか。さすがに言えないので分からないが。

とりあえずこれも一応誉め言葉として取れば、嬉しい(？)わけだし、胸は旬の好み通りということ、喜ばしい限りじゃないか。

「はあ……」

奈津美は思わずため息をついた。

何だか、無理矢理旬のいい所を探してるみたいだ。勿論、全部本当がいいところなのだが、必ず粗も一緒についてくる。

考えすぎて、何が何だか分からなくなってきた。不安になってくる。

自分にとっての旬はなんなのだろうか。旬にとっての自分はなんなのだろうか。

自分の気持ちに自信がなくなってくる。自分の気持ちが分からない

い。

奈津美は匂じゃないとだめなのか……匂は奈津美じゃないとだめなのか……

もしかしたら、代わりなんていくらでもいるのではないか……どこからともなくそんな考えも出てきてしまう。

そう考えると、とても寂しくなった。

奈津美は自宅のコーポの階段を重い足取りで上り、三階まで辿り着く。部屋へ向かいながら鍵を出そうと鞆の中を漁った。

鞆の中に入れた手が、携帯に触れる。

そういえば、今日は友達と買い物に行くから帰ってきてからこっちから電話する、と匂にメールを送ったのだった。

よりもよってこんな時に、電話すると言ってしまった。こんな気分で、匂と電話したら、声に出してしまうような気がする。メールすると送っておけばよかった。と、奈津美は後悔した。

更に悶々としながら鍵を探り出し、奈津美は自分の部屋のドアを開けた。中に入り、鍵とチェーンをかけてしっかりと戸締まりをしてから中に入る。

何も考えずとも毎日の習慣で、奈津美は部屋に入るとまずエアコンをつけてからコートを脱ぐ。

いつもはそれからテレビをつけたり、化粧を落としたりするのだが、今日は鞆から携帯を取り出すと、そのままベッドに寝転んで携

帯を開いた。

操作をし、リダイアルを表示する。基本的にかけるより受ける方が多い奈津美だが、それでも一番上にある番号は匂だ。

このまま、発信ボタンを押せば、匂に繋がる。それが躊躇われた。

匂は待っているかもしれない。いつもメールも電話も、よこすのはほとんど匂の方だから……

そう思ったらするしかない。

大丈夫。匂の声を聞いたら、きっといつも通りにできる。

奈津美は意を決して通話ボタンを押し、耳にあてた。

プルル

「もしもし、ナツ？」

早い。呼び出し音が一回鳴る前に匂は電話に出た。奈津美が電話すると、いつもこれぐらいの早さで出る。これに少しほっとした。

「うん。……相変わらず出るの早いわね。今何してたの？」

いつも通りの話し方、いつも通りの声の調子。それを心がけて奈津美は話す。

「ナツの電話待ってた」

嬉しそうな声が返ってきた。それは、その言葉が本当だという証明になっている。

「そう……」

電話してよかったと思った。やっぱり、声を聞いたなら安心できる。声だけで、さっきまでの重い気持ちが軽くなった。

「ナツ？ 何かあった？」

旬は急にこちらを伺うようにそう言った。

「え……何で？」

内心どきつとしながら、奈津美はそれが出来ないように努めて聞き返した。

「んー……何か声が元気ない。いつもと違う。気のせい？」

気のせいじゃない。旬は、たったこれだけのやりとりで奈津美の異変に気付いたらしい。

何でこういふとこばかりは鋭く感知できるのだろう。

「ううん。何もないよ。ちょっと友達と飲みすぎたからかな」

そう言って、誤魔化した。

「えっ……ナツ飲んだの？ 大丈夫？」

今度は心配するような口調だ。

「どうして？」

「だってナツ、酔ったら荒れるじゃん」

旬が言っているのは、明らかに一年前のことだ。

「なっ……荒れないわよ！ あの時特別だったの！」

奈津美は、ムキになって声をあげる。自然と、いつもと同じ調子になった。

「へへっ。そっか」

へらへらと笑う顔が頭に浮かぶ。しまりがないような顔だけど、奈津美は旬のその顔は嫌いではない。

「……ねえ、旬。……旬は、何であたしなんかと付き合ってるの？」  
思わず、そんな言葉が出てきた。

自分で言っつて、気持ち悪い。こういうことは『あたしのこと好き？』とか『あたしのどこが好き？』のような、聞かれるとうざったい質問と同じ類で好きじゃない。なのに聞いてしまった。それだけ今の気持ちに余裕がなくなってしまったのだらうか……

「何でっつて……そこにナツがいるから？」

「……………」

何か聞いたことのあるフレーズのように返ってきて、奈津美はそれに対する言葉を失う。

「何か違う？」

「うん」

何かというか、全く違う。

「え……つつか、何でいきなり？」  
旬に痛いところを突かれてしまった。

「別に……今思ったから、何となく……だって普通引くでしょ？  
酔っ払いの女とか。ていうか、旬がホテルに誘ったのって下心？」

自分でも珍しいほどに奈津美は早口で口数多く喋っていた。焦るところなるんだ、と、自分で初めて知った。

「ん……まあ、ぶっちゃけ？」

素直にあっさりと言は肯定した。

「だって、目の前でオツパイのおっきいお姉さんが『帰りたくない』っていうもんだからさ？それでちよつと、まあ……うん」  
流石にちよつとばつが悪そうに、旬は言っている。

それは、確かにあの時は奈津美の方がそうなつてもしょうがない状況を作ったのだから仕方ない。

「でもさ、俺、それがナツでよかったと思つてんだ」

「え……」

旬のその言葉の意味が分からず、奈津美は返す言葉に迷う。

「ナツのこと、知れば知るほど好きになるから。こつこつこの、ナツが初めてなんだ」

旬はそう続けた。

「……そんな恥ずかしいこと言わないで」

本当は嬉しいのに、顔だつて赤くなつているのに、旬のように素直な言葉にすることができない。奈津美は、何だか少しクールな口調になつてしまふ。

「うん。自分で言つてちよつと恥ずかつた」

そう言つて旬は笑った。

匂に会いたい。  
急激にそう思った。

「ねえ、匂。十四日のことだけど……」

「うん、何？」

「……匂がうちに来るなら、泊まりでもいいよ」

こんなことを奈津美から言うのは、多分初めてで、恥ずかしく感じた。でも、たまには言ってみてもいいだろう。

「え……いいの？ 平日だからダメって言ってたのに」  
匂は驚いた口調だった。

それもそうだろう。元々は匂が泊まりがいいと言っていたのだ。  
『せっかくのバレンタインなのに！』とごねる匂を『平日だからダメ！』の一点張りで押し伏せたのは奈津美の方だ。

「うん……でもやっぱりバレンタインだから、特別ね。……それに、ケーキ作るの時間かかるし、匂がうちに来るんだったらゆっくりめに作れるし……あと、朝もいつも通りにできるから」

照れ臭くなって言い訳じみたことを付け足してしまった。しかも自分の都合に合わせたというような、可愛くない言い方だ。

「別に匂が嫌ならいいけど？」  
可愛くない言い方が続く。何でこんな高圧的なのだろう。全くそ  
うできる立場じゃないのに……

「行く！ 絶対行く！」

それでも匂は、予想通りの反応を見せる。

それに安心して、奈津美は微笑んでいた。

## 7 アンバランス

本日、二月十四日。バレンタインデー。

午後五時。定時に仕事を終えた奈津美は、ロッカールームで制服から私服に着替えていた。いつもよりもてきぱきと身仕度を整えている。

「奈津美、今日は早いわねえ」

カオルはいつも通りのペースで着替えている。

「ケーキ作らないといけないから」

奈津美はそう言いながら着替えを終える。そして皺にならないように制服をきつちりとハンガーにかける。

「ああ。それに今日はお泊まりだもんねー」

カオルがからかい顔で奈津美を見る。

「べつ別にそれは関係ないから！」

ほんの少し頬を赤くして奈津美は言い返す。

「でもどういう風の吹き回し？ お泊まりOKしたのって」

「……まあ、イベントの時ぐらいはいいかなって思ったの」

『何となく、会いたくなかったから』なんていくら友達でも、という友達だからこそ恥ずかしくて言えない。

「へ〜。まあ普通はやっぱりそういうもんよね。いいなあ…やっぱりあたしも今日会いたかったなあ」

「でも週末会っただけでしょ？」

「うん……でもやっぱり世間がバレンタインムードの中で一緒に居たいじゃない。まあ、ワガママは言えないけど」

「確かにねえ……あつ、じゃああたし帰るね！」

奈津美は時計を見て、急いでロッカーを閉めて鍵をかける。

「じゃあね。お疲れ様！」

「お疲れー。よい一夜を」

そんなカオルの声を背中に受け、奈津美は早足でロッカールームを出た。

奈津美は家に帰って、大急ぎでケーキ作りを始めた。

この前はとつさに思い付いた言い訳でケーキをゆっくりめに作れるからと言ったが、本当ににそうしてよかったと思う。夕方、帰って来てからしか作る時間がないので、もし会って渡すだけなら昨日のうちに作って、今日、ラッピングしてまた出掛けるという面倒臭いことになってしまっていた。

……そう考えてしまうと、やっぱり自分勝手な理由だろうか。旬の家でなく奈津美の家にしたのは、自分の家なら泊まりにしてもあ

まり疲れないからだし、バレンタインに旬の部屋の掃除というのもムードがないと思ったからだ。

まあ、旬だから泊まりならどっちの家でもあまり気にしていないだろう。そう思っていたいいことにした。

一時間半ほどでケーキはできあがった。チョコレートの生クリームでデコレーションも完璧だ。

時計を見てみると、六時半前だった。

旬は今日、夕方にバイトが入っているの、そこから直接来る。六時に上がるから、六時半頃には来ると言っていた。

もうすぐ来るだろうと思い、奈津美は先に夕食の支度を始めた。

それからまた一時間。旬はまだ来ない。

夕食の準備は、とっくにできてしまった。

遅い。いくらなんでも遅すぎる。携帯を見てみても、メールも何も来ていない。

バイトが長引いてるんだろうか。だとしても遅すぎではないだろうか。

旬が連絡もなしにこんなに遅れるなんて珍しい。いつも約束の時間よりもやたら早いことはあっても、遅れることなんてめったにない。

奈津美は出るか分からないが一応匂に電話をかけてみる。

「おかけになった電話は、電波の届かない所にあるか」

受話器の向こうで聞こえたのは、そのアナウンスだった。

奈津美は少し心配になってきた。

確か、夕方のバイトはカフェだと言っていた。そこはここから歩いて十五分ぐらいの所……

行ってみようか。奈津美は思い立って、すぐにコートを手に取り、部屋を出た。

と、思わず出てきてしまっ、ちょっとこの行動はやりすぎだろうかと、奈津美は思った。でも、連絡が取れないわけだし、バイト先かそこから来るまでに何かあったのかもしれない。

それで迎えに行くのは自然なことだ。……と思う。

一応、奈津美はメールを送っておくことにした。

『まだバイト？何かあった？』

『今から迎えに行くからね』

さっき電話して繋がらなかったけれど、念のためだ。

何か理由があつて連絡できなかったのならしょうがない。ただ、何も無いなら早く安心したかった。

もしかしたら、途中で匂に会うかもしれないと思つたが会うこともなく、奈津美は匂のバイト先のカフェの前まで来てしまった。道中も別に何かあつたという様子もなかった。

ふと見てみると、店の看板の入り口に

本日バレンタイン割引

カップルのお客様・二人で200円引きです

という看板があつた。中を覗いてみると、カップルの客がたくさんだつた。

この店は、地元ではケーキが評判で若者の客が多い。そんな店がこんな割引セールをやっているのなら、客も普段より多くなるだろう。

それで遅くなつたのかな？と奈津美は考える。それなら多目に見てやろうと思ひながら、奈津美は店の中に匂の姿を探してみた。

しかし、忙しく動いている店員の中には、匂の姿はない。

丁度上がったとこなのだろうか。

奈津美は、もう一度電話してみようかと、コートのポケットの中の携帯を取り出した。

その時だつた。

店の脇道から、見覚えのある姿が出てきた。

旬だ。きつと従業員用出入口から出てきたのだろう。

「しゅ……」

奈津美は、呼ぼうとして途中で固まった。

旬はその場に立ち止まって後ろに振り返った。そして、旬が出てきた所から、旬を追い掛けるようにして誰かが出てきた。可愛らしい風貌の女の子だった。

二人は、仲良さげに話し始めた。

誰……？

旬と同じ年ぐらいで、背も小さくて、明るめの茶色にパーマをかけた髪型がよく似合っている。そして何より、小さな体と対照的に胸が大きい。

多分、同じバイトの娘だろう。

それは何となく感じとれたのだが、奈津美には、彼女と話す旬は、とても楽しそうに見えた。旬は人見知りをしないし、誰とでも基本的にはあんな風であるのに、奈津美にはそれが変に不愉快に感じた。

なのに声も掛けられず、奈津美はただ二人を見ていた。

女の子の方が鞆から、ラッピングされた小さい袋を取り出し、旬に差し出した。明らかに、バレンタインのチョコレートか何かだ。

旬はそれを笑顔で受け取った。

貰うんだ……

奈津美は目の前の光景をただ呆然と見つめていた。

最後に、二人は一言二言交わし、手を振って別れた。女の子の方は、奈津美がいる方の反対側へと消えていく。

そしてすぐに、旬の視線が奈津美の方へと向き、目が合う。

「あ！ ナツ！」

旬は、ぱあっと表情を明るくして奈津美のもとへ走ってきた。

「ナツ！ 何でここにいんの？ もしかして迎えに来てくれた？」

「……うん」

奈津美は無表情で頷いた。

『何でここにいんの？』

メールを送ったはずなのに、そう聞かれてしまった。

「あ、ごめんな？ 今日、夜からの奴がインフルエンザで急に来れなくなったらしくてさ、バイトの時間延びたんだ」

旬が申し訳なさそうに言う。だから奈津美も、

「そうなんだ」

としか言えなかった。

「でも嬉しいー。ナツがわざわざ迎えに来てくれるなんてさ」

緩みっぱなしの表情で、旬が言った。それにつられて奈津美の表情も緩むが、それでも心の中の変に残ったもやもや感はなくなっていない。

「んじゃ帰る」

旬が奈津美に手を伸ばした。

ほんの一瞬躊躇ってしまっただが、気付かれないように奈津美は旬の手を取った。

「今日バレンタイン割引ってやっててさあ」

歩きながら、旬はいつものように話し始める。

「うん。書いてあったね。200円引きだった」

奈津美はできるだけ普通を装って相槌を打った。

「そう。だからいつも以上に人居てすっげー忙しかったんだ。しかも皆カップルだし。……あーあ。せつかくのバレンタインなのにとんだ災難だよ」

「……しょうがないでしょ。そういう仕事なんだから」

奈津美はそれもいつも通りに言っただつもりだった。

「……ナツ、何かあった？」

旬が奈津美の方を見て、いきなり言った。

「え……」

「この間電話した時も思ったけど……やっぱり元気ないっぽいし」

旬はやっぱり鋭い。

でも、こんな奈津美自身いまいちよく分からない変な気持ちを、旬には言えなかった。

「そんなことないわよ。確かにちよつと仕事の疲れが溜ってるかもしれないけど、別に大したことないから」

無理矢理言い訳を作つて、奈津美はわざと明るい声を出して言った。

でも、旬の目を見ることはできなかった。

「仕事きついなの？」

旬は劣るような、心配するような口調で尋ねる。

その言葉に、奈津美の心が染みた。

「大丈夫。やらないといけないこともちゃんと片付いたし、あとはいつも通りだから」

旬に心配をかける嘘にそれを解消するための嘘を重ねた。なんて最低なことをしてるのかと、自分で自分が嫌になった。

思っていることを、気になっていることを、それとなくでも言えば楽になるだろうか……

「そついえば……旬。携帯、電源切ってたの？」

連絡が取れなかったことを聞こうと思つて、奈津美はそのことに話題を変えた。

「あつうん。そつだ、俺充電切れかけだったから切ってたんだ。あ、もしかしてナツ、電話くれてた？」

「……うん。メールもしたんだけど」

「マジで！？ ごめん、まだ見てなかった」

旬はそう言つてダウンジャケットのポケットから携帯を取り出す。

奈津美は、段々とイライラしてきた。

「……普通、それが先じゃない？」

必死に感情は抑えて、奈津美は旬に言った。

「え……？」

旬はきよとんとして奈津美を見る。

「女の子と話す暇はあっても、あたしに連絡しようとは思わなかったの？」

言つまいと心がけた一番言いたくなかったことが口から出てしまった。

「女の子……？ あ、見てた？ あれ、同じバイトの子だよ。一緒にとばっちり受けたんだ」

旬は事も無げにそう言った。

そんなこと、大体分かってる。でも、旬の口からあっさりと、奈津美以外の女と『一緒』という言葉が出てきたことが、ショックだった。こんなちやちなことにまで反応してしまう。

「ああいう子、旬の好きそうなタイプよね」

胸のあたりなんか特に、と心の中で付け加えて奈津美は皮肉のつもりで言った。

「えー？ まあ、顔は可愛いとは思っけど、別にタイプではないって」

旬はそれに気付かず、いつものように返してくる。

「でも、バレンタインの……チョコか何か貰ってたじゃない？」

「貰ったけど……でもあれは義理だから貰っただけだよ。彼氏に作ったクッキーが余ったからって。皆にも配ってるし、あんまり形もよくないやつだけどって言ってたから貰ったんだ」  
「少しも悪いとも思っていないような口調だった。」

実際、嘘をついているわけでもないのだし、匂に悪いところなんてない。

なのに、奈津美のイライラした気持ちは、どんどんひどくなっていく。

「あ、もしかしてナツ、ヤキモチ？」

奈津美の心境に気付くわけもなく、匂はニツと笑って言った。

「……別にそんなんじゃないから」

いつもより、声が低く重くなる。これだともともない可愛げが、本当になくなっていく。

「ナツ、心配しなくても俺にはナツだけだった。ナツが居れば、俺は生きていけるから」

匂はいつものように笑ってそう言った。

いつもなら、それで奈津美も赤くなりながら『何言ってるの』と言えるはずだった。なのに、今は、そんな風にできなかつた。

苛立ちだけが、募っていく。

奈津美は、黙って立ち止まった。

「ナツ？」

半歩ほど前に出た匂が、奈津美の方に振り返った。

「何ヘラヘラしてんの……？」

また声のトーンが下がっている。明らかにいつもの様子じゃない。

「え……？」

匂も奈津美の異変に気付いたが、それでも理由が分からずただ呆然としている。

「少しは悪いとか……申し訳なさそうな態度はとれないの？」

語調も声も、荒くなっている。こんなひどい自分は初めてだった。

「あたし……不安だったんだからっ。匂が……いつも時間通りなのに連絡もなく一時間以上も遅れて……電話しても繋がらないし……心配したんだからっ！」

こんな責めるような言い方はよくないとも、やめないといけないとも思っている。でも止まらない。

「あたしが……そういうの思わないとでも思ったの？ 匂が何時間遅れても、平気な顔して、簡単に許すとも思ってたんの！？」

奈津美の荒げた声に、道行く人間が振り返ってまで二人を見る。

そんな好奇の視線も、今の奈津美には気にならなかった。

「そんなことないっ！ ごめんっ……俺、そこまで考えられなくて……でも連絡できなかったのは、客が多かったから時間なくて……終わってから、ナツの家まで走りながら電話しようと思ったから……その前に呼び止められて……」

「もういい！」

旬が必死に言っているのを、奈津美は無理矢理遮った。

旬の言葉を、冷静になって素直に聞けばよかったのに、奈津美にはできなかった。

「何が『ナツがいれば生きていける』よ。そう言えば機嫌とれなくても思ってるの！？ どうせ旬はあたしが身の回りのことをやってくれるから、あたしがいないとダメなんでしょ！？ そんなの別にあたしなんかじゃなくてもいいじゃない！」

「ナツ……違うよ……」

「何であたしがこんな思いしなれないといけないの！？」

奈津美は、もう旬の言葉を聞こうともできなかった。ただただ、自分の感情を剥き出しにして、思ってもないことばかりが口から出てしまう。

「旬の部屋の掃除も……料理も洗濯も、あたしがやってくれて当たり前前って思ってたの！？ あたしは旬の母親じゃないのよ！」

そこまで言い終わった後、奈津美は肩で息をしていた。旬を見ると、悲しげな目をして、まるで叱られた子供のような表情をしていた。

奈津美は、その顔を見たくなくて、うつむいた。

「ナツ……ごめん。ごめんな……」

そう何度も旬は謝りの言葉を繰り返した。

旬は悪くないのに……悪いのは、自分なのに……

「もう嫌……これじゃあ、あたしばかりが旬のこと好きだけみたい……」

奈津美は、小さくそう呟いた。

「え……？」

奈津美は、旬の手を振り解いて走り出した。

「ナツ……！」

旬は大声で奈津美の名前を呼んだ。

それでも、奈津美は、振り返らずに、逃げるように走った。

「ナツ！ 待って！」

後ろで旬の声が何度も聞こえた。

でも、奈津美は立ち止まりも振り返りもせず、人混みの隙間を縫って、走り続けた。

コーポの階段も駆け上がり、奈津美は部屋へ向かった。

下の方で、足音がする。旬がここまで追い掛けて来ている。

何で来るの……

そう思った。でもきつと、追い掛けて来なかったら、確実に『何で来ないの！？』と、思っていただろう。

奈津美は、そんな自分勝手さに、更に嫌気がさした。

匂が来る前に、奈津美は急いで部屋の鍵を開けて中に入った。そしてすぐに鍵を閉めてチエーンをかけた。

急に止まったせいで汗が吹き出して、久々にこんなに走ったせいで足がガクガクしている。奈津美はドアにもたれかかった。

「ナツ！」

ドアの向こうから声が出て、同時にドアノブがガチャガチャと音を立てた。

奈津美はビクリと肩を震わせた。

「ナツ……ごめん……」

走ったせいか、匂も荒い呼吸でそう言った。

「俺……ナツがそういう風に思ってたとか、全然考えてなくて……」  
匂は、奈津美の言葉にも行動にも、一言も疑問や責めるような言葉を発しなかった。

きつと、奈津美の言ったことを、そのまま受け取ったのだろう。

匂は素直だから……

「ねえナツ……開けて……入れてよ」

匂の切なげな声が聞こえた。

どこでどうして匂のように素直になれないのだろう。

「……帰って」

奈津美の口からは、冷たい言葉しか出なかった。

「ナツ……」

「帰って。旬の顔……見たくない」

今、旬に会ったら、また責めてしまいそうで、そんな自分が嫌になって、また責めて……悪循環に陥りそうだったから……

「帰って……」

奈津美は絞り出すような声になっていた。

ドアの向こうの旬は、しばらく何も言わなかった。

そして、そのまま何も言わず、ゆっくりとその場を離れる音が聞こえた。旬の足音が、遠ざかっていく……

旬の足音が聞こえなくなると、奈津美はその場にへたり込んだ。

「……ふっ……うっ……」

奈津美は涙を溢していた。

泣くのはいつぶりだろうか。奈津美は、嗚咽を漏らしながらただ泣いた。

自分が堪らなく嫌になった。

結局は自分中心だ。

今日は、奈津美が会いたいから、わざわざ旬に来てもらったはずなのに……安心したかっただけなのに……逆に不安になって、旬に当たって……何をしてるんだろう。

旬に言われた通り、ただ、あの女の子に妬いてしまったただけだ。それだけなのに、どうしてこうなってしまったのだろう。

旬に言ったことは、全部が全部、本音ではない。あそこまでひどくは思っていない。

……なのに、弁解もせずに逃げて、追い掛けて来てくれた旬も、追いついてしまった。

もう無理なのかもしれない……

そう思って奈津美は更に泣いた。

## 8 喧嘩の意味

「気持ち悪……」

翌日、奈津美は胃のムカつきを抱えながらも出勤した。

ロッカールームで着替えながら、何度も同じように咳いている。

「そりゃそうでしょ。ヤケ食いでケーキをホールで食べたんでしょ？」

奈津美から昨夜の話全部聞いたカオルが、呆れたように言った。

「本っ当……朝来てビックリしたわ。別人かと思った」

「どういう意味……」

「だって顔ヒドイし。顔むくみまくり、目腫れまくり、隅もできまくり。一晩で何があったの？ ってぐらい顔違うわよ」

カオルの言葉に、奈津美は何も返せなかった。

全部本当のことだ。

昨夜、匂が帰ってしまって、一人で玄関で泣いた後……奈津美は、悲しいのと寂しいのと悔しいのと……たくさんの感情を『食』にぶつけた。

二人で食べるはずだった夕食を、二人分全部食べ尽し、匂に渡す予定だったチョコレートケーキも、ホールで丸ごとがつついた。しかも泣きながら……

そして食べたならそのまま寝てしまい、朝起きた時にはひどかった。目が開かないほど腫れてしまい、お岩さん状態。鏡で見るともつとひどく、顔もパンパンで、ぐっすりと眠れなかったせいで目の下にはびっしりと隅ができていた。

カオルの言った通り自分でも本当に別人かと思った。

しかも食べ過ぎで胃がもたれている。

こんな顔でこんな体調で、仕事に行きたくない。そう思ったが、そんな理由で休むわけにもいかない。奈津美は、熱いシャワーを浴びて、化粧をし、胃薬を飲んで、何とか出勤したのだ。

「あー……吐きそう」

「大丈夫？ ていうか、太るわよ」

カオルは、嫌なことを言ってくる。でも、現実だ。

昨夜はそんなこと気にせず、勢いで食べた。夜にあんなに食べて、しかもケーキを食べたら、恐ろしいことになる。

体重、体脂肪、贅肉、ニキビなどの吹出物が増える……最悪だ。

匂だったらあれだけ食べても太らないし、肌だって綺麗だ。

何で匂はいつも平気なの……

そう思って、はつとする。……無意識に匂のことを考えていた。

最悪……

奈津美は深く溜め息をついてうなだれた。

「ねえ、大丈夫？ 本当、休んだ方がいいんじゃない？」

よっぽど気分が悪いと思ったらしく、カオルが奈津美の背中をさすった。

「……大丈夫。ちょっと、ギリギリまでここにいるから……」

顔を上げず、奈津美はカオルにそう言った。

「……分かった。じゃあ先に行ってるね」

奈津美を気遣ってそう言うと、カオルはそっとロッカールームを出て行った。

一人になって、奈津美は大きなため息をついた。

一体何をしているんだろう……

旬に勝手に腹を立てて、追い返したはずなのに、思わず旬のことを考えてしまっている。きっと、癖になっているのだ。

奈津美は、鞆から携帯を取り出して開いた。不在着信が三件、メールが十件……全部旬からだ。でも、奈津美はかけ直すことも、メールを開くこともしなかった。

携帯を閉じ、鞆に放り込み、奈津美は顔を上げた。

鏡を見ると今の自分の顔が映り込む。相変わらず、ひどい顔をしている。

朝に比べればましになったものの、まだ腫れぼったい目、むくみ

もとれていない。目の下の隈は、ファンデーションとコンシーラーで必死に隠そうとしたが、今日は化粧のノリが悪いせいで隠し切れ  
てない。

もう一度ため息をつくとき、奈津美はロッカーを閉め、オフィスへ  
向かった。

「一回彼氏君と話した方がいいんじゃない？」

昼休み、食堂でカオルに言われた。

奈津美は、まだ胃の具合が悪くサラダを食べていたが、カオルの  
言葉によって更に食欲が失せた。

「彼氏君からメールとか来てるんじゃないの？」

着信やメールのことは言っていないのに、カオルは鋭く言い当て  
た。奈津美は言葉に詰まる。

「奈津美の気持ちも分からなくはないけど……あたしもつい彼氏に  
当たる時あるし……そんな場面見たんなら尚更ね……でも、言い過  
ぎたって思うんなら奈津美も悪いよ。わけも言わずに追い返されて  
……彼氏君、絶対困惑してるって」

カオルの言うことは尤もだと、奈津美には分かっている。

むしろ『奈津美も悪い』ではなく『奈津美が悪い』ということも

……

「……でも、旬に何ていったらいいか分からないし……また当たっ  
ちやいそうだし」

奈津美は俯いて小さくそう言った。

「……奈津美達って、もしかして喧嘩とか、言い争いとか……した  
ことないの？」

カオルが驚いたような顔をする。

それを言われて、奈津美は考えてみる。

喧嘩……という喧嘩は、したことないのではないか。

パスタ屋の会計でもめたことはあるけれど、それはすぐに解決し  
たし、あれ以上で険悪なことになったことはない。

そもそも、だ。

「あたしって……旬の前までも、別れる時以外で彼氏と喧嘩したこ  
とないかも……」

「ウソ……？」

カオルは目を丸くした。

「……ていうか、喧嘩が原因で別れる、みたいな感じだったかも……  
……」

思い起こしてみれば、今までの別れのパターンは大体同じだ。

まず、何かで言い争いが始まる。それは些細なことだったり、よくある浮気をしたしてないの話だったり、様々だったが、言い争いになると、奈津美がつい素を曝け出し、罵詈雑言に近い言葉を浴びせる。そしてその後はこうだ。

『お前そんなこと言う奴だったのか？』

『お前と付き合ったのが間違いだっただよ！』

『もうお前みたいな奴は無理……』

啞然、逆ギレ、ドン引き……リアクションは個々だったが、そんな言葉と共に別れてきたのだ。

だから、奈津美には喧嘩して仲直りという感覚がよく分からない。

「奈津美……それなら尚更ちゃんと話すべきだっただ。喧嘩って別れるためにするものじゃないんだから。月並みだけど、お互いを理解するためのものだと思う。ていうか、ある方が普通よ」

「そうなの？」

カオルの言うことに、二十三にして、目から鱗、という気分だった。

「そうよ。一回もしたことないって人達もいるにはいるだろうけど。でも、あたし達だっただ。するし。」

「そうなの!？」

奈津美は驚いて目を丸くする。カオルと彼氏は、順調に付き合っているイメージがあっただ、喧嘩なんて一度もしたことはないと思っただ。

「そりゃあるわよ。まあ、大抵は本当に下らないことだけだ。デー  
トの前日にいきなり仕事入ったとか、向こうがストレスたまってる  
虫の居所が悪かったとか」

「えー……それで、そういう時はどうするの？」

奈津美は、興味津々という様子でカオルに尋ねる。

「どつって……奈津美、本当にひどい喧嘩の仕方しかしたことない  
のね……」

カオルは、もう呆れたような表情になる。

「別に普通よ。言いたいこと言うだけ。それから、相手の言いたい  
こともちゃんと聞く」

「それだけ？」

「それだけ」

きよとんとした様子の奈津美に、カオルははつきりと頷く。

「それって、素で？ 結構キツイこといったりする？」

「そりゃするわよー。だって、いくらなんでも一度も素も本音も出  
さなかったらストレス溜るでしょ。お互いに」

「……うん」

確かに、今まで言いたいことを我慢していたが故に、言葉が酷く  
なるという節はあるかもしれない。

旬に向けてしまった言葉も、きつとそうだった。

「でも、それは自分がただぶつけるだけじゃなくて、相手の言うこ

ともちゃんと受けとめて初めて成立するの。それで、自分の通したい所は通す、逆に相手の意見を尊重して妥協するところはする。…そんな感じよ」

まるで解説者のようなカオルの言葉を、奈津美はただ黙って聞いた。そしてカオルは、更に続ける。

「男女だからっていう前に、そういうのって人間関係として必要なものじゃない？ 単純に、人と付き合うんだから、他人に受け入れてもらうことも他人を受け入れることも」

なるほど、と奈津美は思う。とても説得力がある。

「……でも、どうしても受け入れられなくて、受け入れてもらえないって場合もあるだろうし……その時は本当に合わないってことでしょ。だから奈津美」

カオルの視線がいきなり奈津美に向き、何となくぎくりとした。

「彼氏君とちゃんと話して、彼氏君が奈津美にとってそういう相手なのか、ちゃんと見極めてみたら？ もしそれで別れることになるんなら、彼はそれまでの相手だったってことでしょ」

本当に、カオルの言うことには説得力がある。

今までの彼氏がいい例だ。些細な言い争いから、お互いの本心を知り、相手はその奈津美を受け入れてくれなかったわけ、奈津美もまた、相手を受け入れようとしていなかった。

要はそれが『そこまでの関係』だったということだ。奈津美と句も、そうなってしまうのだろうか……それは誰にも分からない。

## 9 一番の本音

その次の日も、旬からの着信とメールが何件も入っていた。しかし、奈津美は相変わらず、電話に出ることも、かけ直すことも、メールを開くこともしなかった。

そして、旬と連絡をとらないまま、その翌日。

奈津美はもう携帯の電源を切って一日を過ごした。電源を入れていたら、いちいち気にしてしまいそうだから……

この日の夕食は、前から約束していたカオルとの外食だった。雑誌に載っていた、和食の創作料理の店だ。

二人はいつも通り、何気ない会話をしていた。

「そう言えば、奈津美」

笑っていたカオルが、ふと真顔になる。

「彼氏君とちゃんと話したの？」

奈津美の箸がピタツと止まる。カオルには、あれ以降そのことについて何も言っていない。

「……話してない。ていうか、メールも電話も無視してるし」

奈津美はカオルの方は見ず、そう言った。誤魔化すように箸を動かさず、料理を口に運んだ。

「え……」

今度はカオルの方の箸が止まった。

「話してないの!? 何で!?!」

カオルは身を乗り出すほどの勢いで聞いてくる。

奈津美は何も言わず料理を食べる。

「ちょっと、奈津美!」

カオルの厳しい声を聞き、奈津美は箸を止める。

「……分からないの」

小さなため息混じりに奈津美は呟いた。

「分からないって……何が?」

「旬に、何を言いたいのか……分からない」

奈津美の言葉に、カオルは黙って眉をひそめた。

「例えば、三日前のことを謝るにしても……どう謝ればいいのか分からない」

「何で……どういふこと?」

「……色々考えたら、あの時出てきたのは、本音だったのかもって。だって、普通思ってもないことなんて口から出てくるはずないじゃない? だから、自分でも気付かないうちに、旬に対してああ思ってたのかなって……」

奈津美の口許には、苦笑混じりの笑みが浮かぶ。

「だいたいさ、匂だつて流石に嫌気さしたと思うんだよね。勝手にキレて、いつも以上にあんな口汚くなつて、言うだけ言つて後は無視。あたしだったら、こんな女嫌だもん。このまま付き合つても、お互いストレス溜りそうだし……そろそろ別れ時かなーって」  
軽く笑い飛ばして、奈津美は言った。しかしそれは、単なる空元気のように虚しく聞こえる。

「いいの？」

カオルは、静かに口を開いた。

「奈津美は、本当にそれでいいの？」

あまりの真剣さに……いや、多分それは関係なく、奈津美は固まつてしまった。自分でも何故か分からない。

大きなことを言つておきながら、いざ面と向かつて確認されたら、口が動かなかつた。『うん』と頷くことだけでもできなかった。

見兼ねたカオルは小さくため息をついた。

「あたしは奈津美と彼氏君は、すごくお似合いなんだと思つてた。奈津美、いつも何だかんだ文句言いながら楽しそうだもん。彼氏君の話してる時」

「え？」

カオルのいうことの意図が掴めず、奈津美は更に言葉を引っ込める。

「それに、奈津美の話の彼氏君も、奈津美のことがとにかく好きなんだなあって……あたしはそう思つたけど？」

「ウソ……どこが？」

奈津美は、少し驚いた。今まで、カオルに話したことは、旬の愚痴というか、どちらかと言えば陰口っばい（そこまでひどくはないが）。そのどこに旬の気持ち分かる要素があったというのか……

「奈津美が楽しそうだから。奈津美、前の彼氏と付き合ってた時はそんなに楽しそうに話してたことないし」

カオルは、簡潔に同じことを言っただけ、更に続けた。

「だから、奈津美はよっぽど彼氏君のことが好きで、彼氏君は奈津美をそういうふうにさせるぐらいに、奈津美のことが好きなんだって、あたしは思ってた」

カオルは、お茶を一口飲み、また更に続ける。

「別に奈津美はそうじゃないっていうなら、それで別れるって言うんなら、あたしは何も言えないけど……当人同士のことだし。でもやっぱりちゃんと話してから別れなよ？ 自然消滅とか、後々面倒なんだから」

最後の方は説得するような口調だった。

「……うん」

奈津美はやっと声を出し、頷くことができた。

カオルと別れて、奈津美はトボトボと帰路についていた。

じつくりと、考えてみる。旬と、奈津美自身のことを……

別れて後悔しないのか……と聞かれたら、正直どうか分からない。ただはつきり言えるのは、後悔しないとは言いきれないこと。

こんなこと、考えるのは初めてだ。旬と別れるなんて、考えたことなんてなかったのかもしれない。

『俺、ナツを振るなんてバカなこと絶対しないよ。だから、ナツも俺のこと振るなよな』

ふと、その言葉を思い出す。旬が口癖のように言うことだ。

それを聞くと奈津美は、『分かってる』と軽く曖昧に返事をしていた。

その言葉を信じてないというわけではないが、当てにもしていないというか、真に受けてはいなかった。

こんな会話は、付き合いえば定番のものだと思っているのだ。

付き合い合っている時の絶頂期に、必ずと言えるほど男からそんなことを言われてきたからだ。

『俺たちは絶対別れることなんてないよ』

『俺には奈津美しかないから』

『俺のことは信じてくれて大丈夫』

男達は簡単に永遠を約束するような言葉を口にして、そのくせ別れる時はそんなことを忘れたかのように別れの言葉を言う。また、下手したら浮気をする。それが奈津美の今までの経験からの見解だ。そして、それを真に受けてしまうと、別れた時に後悔する。別れ方によれば悲しさが倍增する。もしくは、『何であんな男の言うことを信じたのよ!? あたしのバカ!』と、腸が煮え繰り返りそうなほどの苛立ちに見舞われる。(奈津美は比較的後者の方が多い)だから、奈津美は、こういう話題になった時は、適当にやり過ぎず。

それに、好き同士付き合っていれば、お互いにそんなことを思うのは、当たり前だと思う。それをわざわざ口に出して確認するようなことは、奈津美は好きじゃない。

奈津美としては、そんな言葉がなくても、信用できる態度というか、ちゃんとした気持ちがあれば十分だ。

……旬は……そう考えると旬は、口にしてもしなくても、そういうのは伝わる。むしろ、いつでもどこでも、露骨なくらいに態度にも言葉にも……体全体で奈津美に対する気持ちを表している。

あんな奴と、初めて付き合った。あんなに、バカみたいに素直な男……

旬は……一度でも、ほんの一瞬でも、何でこんな女と付き合ってるんだろっ、とか、思ったことはないんだろっか……

そんな様子は、奈津美の知る限り一度も見ることがない。奈津美が気づいていないだけなのか、もしくは、本当に一度も思ったこと

がないのか……

流石に、今回のことで、少しは思っただろう。

奈津美は、携帯を取り出した。

今日はずっと落としていた電源を、やっといれる。

操作をし、受信ボックスを開いた。匂からの未読のメールが……  
数えてみると二十件になっていた。

奈津美は、それを古いものから、順番に開いていく。

まず最初は、二月十四日十七時五十八分。奈津美が匂を追い返した後だ。

『今日は本当にごめん！』

俺、ナツのことちゃんと考えてなかった。ナツが怒るの当たり前だよな。

本当にごめん！』

とにかく謝っているようだ。あの場の流れでは、とりあえずそうするしか思い浮かばなかったのだろう。

そして、次が深夜一時過ぎ。

『ナツ

ちゃんと謝るから、電話したい。いつでもいいから、電話下さい』

奈津美は次々とメールを開いていった。

「ナツ

メールだけでいいから、返事欲しい。

いつでもいいから。俺待ってるよ」

「ナツ。本当にごめん。

許してくれなくてもいいから、話したい」

その後も似たようなメールの内容だった。

「ごめん」

「ちゃんと謝りたい」

「話したい」

「連絡ほしい」

そんな内容が繰り返されていた。

奈津美に対して、責めたり怒ったり、そんな言葉は一切使わずに

……

あんなに自分勝手なことばかりして、ひどいことを言ったというのに……

そっだ……

旬は、そんなこと言ったり、ひどいことはしない。

そんなこと、分かってたはずなのに……

『流石に嫌気さしたと思うんだよね』

どうしてあんな風に言えたんだろう。

奈津美は、ゆっくりと携帯を操作し、メールの問い合わせをする。電波状況が悪いせいで『接続中』という文字が長い時間点滅している。

もしも、匂と別れたら……

奈津美はそれを想像してみる。

もしも、匂と別れたら、もう匂とは、連絡をとることはないだろう。それは分かる。

このままの別れ方だと、別れてからも友達としてなんて、付き合いえる自信がない。

匂からの電話もメールも、もうなくなると考えたら……例えば今の、問い合わせしているメールが、匂から一通もきていなかったら……

奈津美の頭が真っ白になる。足も、無意識に止まった。

嫌だ

この時奈津美は初めて気付いた。自分の中の、匂の割合の大きさに

バイブがなった。

メールが来ていることを知らせている。

受信メールは四件……

奈津美は受信ボックスを開いた。

沖田旬の名前が4つ、並んでいた。それを見て、奈津美は、泣き出しそうなくらいに安心した。

そして、それを順番に開いていった。

今日の一件目は朝九時過ぎ。内容は、昨日までと同じような、ごめん、というもの……

二件目を、開いて、奈津美は目を見張った。今までと少し違い、今までで一番短かった。

『ナツに会いたいよ』

たったそれだけの一文……  
たったそれだけでも、旬が伝えたいことは充分に分かるものだった。

奈津美は本当に泣きそうになるのを必死に堪えて、次のメールを開いた。

次のメールは、午後五時半過ぎ……丁度、奈津美が遅めに仕事を  
終えていた頃だ。

『今からナツの家に行くよ』

奈津美は目を丸くして今の時間を見た。午後九時四十七分……も  
う四時間以上経っている。

どうしよう……

何でこんな時に、電源を切ってしまったのだろうか……  
奈津美は今更になって後悔した。

そして、あと一件……七時前に来ていたメールを開くと

奈津美は携帯を握りしめ、走り出した。

『もしそれで別れることになるんなら、彼はそれまでの相手だ  
っ たってことですよ』

走っている奈津美の頭の中に、カオルの言葉が響いた。

怖かったんだ。それを思い知るのが……

もし、匂と話をしても、別れることになったら、奈津美にとって  
匂は『それまでの相手』だということ……

それを、知りたくなくて、奈津美は旬を避けてしまった。  
そんなことをしたからといって、状況がよくなるというわけでも  
ないというのは、分かっていたはずなのに……

旬からのメールは、またシンプルな一文だった。

『俺、ナツが帰ってくるまでずっと待ってるよ』

奈津美の今の気持ちは、きっと旬と同じ……同じだと、奈津美は  
信じている。

旬……ごめんね。

旬に、会いたい……

10 素直な気持ち（前書き）

これでも削ったのですが……長いです（苦笑）

## 10 素直な気持ち

奈津美はコーポの階段を一気に駆け上がり、呼吸を乱していた。立ち止まって、息を整える。そこに風が吹いて、うっすらと汗をかいた体を冷やした。

今日は寒い……

天気予報では確か、この冬一番の冷え込みと言っていた気がする。

ぞくりと奈津美の背中に悪寒が走った。

「……ふえつぶしっ！」

誰かの激しいくしゃみが聞こえて、奈津美は肩を震わせた。誰もいないと思っていたので驚いた。

しかし、今のくしゃみは何となく聞き覚えがある気がする。

「ふえつぶしっ！」

……また聞こえた。

もしかして……

奈津美は、自分の部屋の方へ小走りで向かった。

部屋の前は、電灯が点いているとはいえ薄暗い。しかし、奈津美の目にははつきりと映った。

奈津美の部屋のドアの前にしゃがみ込み、寒そうに体を丸く縮こめている、旬の姿を……

「……旬」

奈津美は、その名前を呼んだ。自分が思ったよりも小さく細い声になってしまった。

それでも、旬はすぐに反応して奈津美の方に向いた。

「ナツ！」

奈津美の顔を見ると、立ち上がって奈津美の前まで寄ってくる。

「お帰り、ナツ！」

旬はいつものように笑ってそう言った。本当に、何事もなかったかのようにだった。

「ただいま……」

奈津美は、いつも通りの旬につられて、そう返事をしていた。

「旬……本当に、ずっと待ってたの？」

「うん」

「こんなに寒いのに……風邪ひいても知らないわよ」

言葉はいつも通り、こんな時に限っても可愛げがない。しかし、声は、いつもより力がなかった。

「大丈夫だって。俺、バカだから今まで一回も風邪ひいたことねえもん」

そう言って、旬は笑った。

平気そうなことを言っただけはいるけど、旬の鼻の頭は寒さで真っ赤だった。本当は寒くてしょうがなかったに違いない。

「ふえつぶしょん！」

旬は横を向いて再び派手なくしゃみをする。

「やっぱちよっと寒いな」

旬は恥ずかしそうに笑って、音をたてて涙を吸った。

旬は鼻水を垂らしていた。それに気付いていない旬が、何だか情けなくて間抜けな顔で、思わず奈津美の顔が緩んだ。

「旬、鼻水出てる」

「え……マジで!?!」

旬は涙を睨りながら、手の甲で鼻の下を擦った。

奈津美は、鞆の中からポケットティッシュを取り出して、その一枚を旬の鼻に持っていく。

「ほら、ちゃんとかんで」

まるで、母親が小さな子供にするようにして、奈津美は言った。

旬は、派手な音をたてて鼻をかんだ。ジュルジュルと音をたてて、鼻水が出ているのティッシュ越しの感触で分かる。

こんなことは、旬だからできる。旬だから、別に嫌じゃない。

「うわっ。大量」

旬自身も驚いたようにそう言った。

それがおかしくて、奈津美は笑った。

「へへっ」

旬も、奈津美を見て、いつものように笑った。  
その時にふと触れた鼻先が、とても冷たい。

「寒かったよね……早く中、入る」

できる限りの優しい声を心掛けて奈津美は言った。

「うん」

旬は、嬉しそうに頷いた。

奈津美は、部屋に入ると、すぐにエアコンをいつもより温度を高くして付け、こたつの電源も入れた。

「旬、こたつ入ってて」

奈津美はコートを脱ぎながらそう言った。

「うん」

旬は一直線にこたつへ向かって体を入れる。

奈津美はキッチンへ行き、ケトルに水を入れて火にかけた。

「匂、ココアでいい？」

匂が好きなものを入れようと思い、奈津美は匂に声をかけた。

「うん。ありがとう、ナツ」

匂は上半身で奈津美を振り返って、笑顔で言った。

奈津美は、湯が沸く間に、カップを二つとココアパウダーを用意する。

ココアは、匂が好きだから、必ず置いておくようにしている。

コンロの前に立ち、奈津美は匂の方に背中を向けたまま、黙っていた。

今日は、いつもより静かだ。エアコンが動いている音がはっきりと聞こえるほど……

いつもなら、匂がやたらと話し掛けてくる。もしくは、独り言ともつかないような調子で何かを言っている。何せよ、匂が何かしら話すことによつて、いつもはその場が持っている。

でも、今日は、その匂が何も言わないせいか、静かになっている。やっぱり匂も気まずいのだ。

確かにそれは当たり前だ。いくら匂でも、三日前から今日までの膠着状態があつて、いきなりいつも通り、なんてできるわけがない。きつと、さつきまでは、必死に装っていたに違いない。

このまま、匂が口を開くのを待ってるわけにはいかない。こつちから、ちゃんと話を切り出さなくてはいけない。

三日前のこと、そして、それからずっと連絡を取らなかったこと……それだけでも、謝らなければならぬ。

そうは思っているけど、なかなか口は動かなかった。

『この前はごめんなさい』

『ずっと連絡も無視してごめんなさい』

『この前言ったのは、本心じゃないから、気にしないで』

『あの時はあたしがどうかしてたの』

心の中では、言いたいことは次々出てきて繰り返すことができるのに、中々素直に口を開くことができない。

どじしよじ……

そう思った時だった。

「ナツ……ごめんな」

旬のそんな声が聞こえた。

「え……？」

奈津美は驚いて、旬の方に振り返った。

そこには、きちんと正座して奈津美の方を向いている旬の姿があった。

旬は、真剣な顔で口を開いた。

「俺……本当、今までナツのことちゃんと考えてなかったっていうか……いや、ナツのことは本当に好きだし、すっげー大事に思ってるよ！……でも、知らないうちにナツに甘えてたのは、確かだ

と思う。ナツがどう思うかとかは、やっぱり考えられてなかった…」

そこまで言って、旬は俯いた。

「これじゃあ、俺、ナツの彼氏って言えないよな……」

そう呟くと、顔を上げて再び真剣に奈津美を見つめた。

「でも、これからは気を付けるから……だから……別れるとか、考えないでほしいんだ！俺は、ナツが一番大切だから…ナツがいないとダメなんだ！」

「旬……違うの！」

奈津美は慌てて声にした。

「旬は全然悪くないの！あの時は……あたしが勝手にイライラしてて……それで旬に当たるみたいになっちゃって……どうかしてたの。連絡も……何だか気まずくてできなくて……だから、旬のことを悪く思ったわけじゃないの！」

奈津美が一気に話した様子を見て、旬はきよんとしていた。

「……じゃあ、別れようとか、思ってない？」

旬は、神妙に尋ねた。

「うん」

奈津美は、すぐに頷く。

「じゃあ、これで仲直り？」

「うん」

奈津美はまた頷く。すると、旬の顔が綻んだ。

「よかった……」

その一言に、本当に安心しきったような、まさに胸を撫で下ろしたという、そんな気持ちが込もっていた。

「……しゅ」

奈津美が旬を呼ぼうとしたらタイミングが悪く、ケトルがピーツと高い音をたてた。

奈津美は慌ててコンロの方向向き直り、火を止めた。

本当にタイミングが悪い……

おかげで肝心なことが言えなかった。

旬に『ごめんなさい』の一言を……

自分の性格がどれだけ意固地なのか、嫌というぐらい思い知らされる。

たった一言なのに、何で言えないのだろう……

旬の方が分かっている。こういう時はどうしなないといけないのか

……

結局は、旬まかせだ。さっきのだって、旬が先に口を開いてくれなかったら、何も言えてなかった。言えたところで、謝罪というよりは言い訳で、本当に言わないといけないことは言えてない。

奈津美は小さくため息をついた。

ココアを入れて、奈津美は匂のところへ持って行く。

「あ、ありがとう、ナツ」

匂の前にカップを置くと、匂はいつものようにニコツと笑顔を奈津美に向ける。奈津美もつられるように、顔を緩めて、匂のそばに座る。

「ナツ。これ……」

匂は、ココアを一口飲んで一息つくと、着たままだったダウンジャケットのポケットから、何かを取り出してこたつの上に置いた。

それは、手のひらと同じぐらいの大きさの黒色で光沢のある紙袋だった。ピンクのリボンで飾られて、プレゼント用のラッピングをされているものだと分かる。

「何？ これ……」

奈津美は、それを見て、首を傾げた。

「開けてみて」

匂は何だか照れくさそうに笑いながらそう言った。

意味の分からないまま奈津美は言われた通り、その袋を手にとつて裏返し、口をとめてある金色のシールを丁寧にはがして開けた。

逆さまにして手の上に出てきたのは、小さくて細長い直方体の箱だった。それは、新品の口紅だった。

「旬……これって……」

奈津美が驚いて旬の顔を見た。

「うん。この前、俺のせいで折っちゃったから……本当は来月に渡そうと思ってたんだけど、その……色々、ナツに嫌な思いもさせるから、そのお詫びっていうか、さ。あつ、でも別にこれでチャラにして貰おうとか、そういうことじゃないから！……何ての？俺なりの誠意っていうか……」

旬もいっぱいいっぱいらしく、段々しどろもどろになっている。それだけで、旬の気持ちが伝わってきた。

「同じバイトの人に聞いたり、雑誌借りたりしてさ、人気あるらしいのにしたんだ。色とか、ナツに合いそうなの選んだんだけど……」  
照れ隠しなのか、下を向いて頭を掻きながら旬は言葉を続けた。

「でも、口紅って高いんだな。俺、びっくりしたよ。女の人って大変なんだなって改めて思った」

普通、マナーとして自分があげたプレゼントの値段のことなんて、言ったりしない。でも、旬だから許せる。

実際、旬がくれたのは、人気ブランドのもので、旬にとっては、大きな買い物だったに違いない。それは、奈津美のためにしてくれたことだ。

「……ありがとう」

大事に、包み込むようにして、奈津美は口紅を握った。

「へへっ。どういたしまして」

旬は嬉しそうに、笑った。いつも通りのしまりのないその表情が、奈津美の心をくすぐった。

それから旬は緩みっぱなしの表情で、ココアを一口飲むと、再び口を開いた。

「俺さあ……あの時、ぶっちゃけ嬉しかったんだ。ナツが俺のこと心配してくれてたことか……ナツが言ったこと」

「これじゃあ、あたしばかりが旬のこと好きだけみたい……」

「え……？」  
奈津美は困惑する。

あの状況で、あの自分勝手な発言が、どうして嬉しいと思えるのか……

「何か……初めてだったからさ。ナツがはっきり俺のこと心配してたとか、好きだって言うてくれたの」

視線をココアに向けて動かさずに言葉を紡いでいく旬を、奈津美はただただ見つめていた。

「俺……ちょっと不安だったから……いつも、俺だけがナツのこと好きだって言うて、俺だけがナツのこと好きなんだと思ってた。ナツが俺のことどう思ってるか、自信なかったんだ。付き合い始めたのも、何だかんだ言って、俺が無理矢理ってところもあったし……ナツは優しいから、別れようとか言えなかったりしたのかなって思ったり？ だったから、嬉しかったんだ」

旬は、苦笑して、またココアを一口飲んだ。

「あ！でも別にナツに言われたのに懲りてないわけじゃないから！  
後でメチャクチャ後悔したし！」

すぐに慌てた様子で、旬はそうフォローを入れる。

旬は自分のためにそこまで必死になっているのに、奈津美は、伝えなければならぬことを、何一つ言えてない。

こんな自分のために、旬はこんなに必死になってくれているのに

……

「え……ナツ？」

旬の驚いた声が聞こえた。

奈津美は涙を流していた。誰かの前で、泣いたのは、小さい頃以來だ。  
それも、旬の前で泣いたのなんて初めてだ。

奈津美は俯いて、声を出さずに泣き始めた。

「ナツ？ごめん！俺、また変なこと言った？」

焦りながら旬は奈津美の顔を覗き込もうとした。

次の瞬間、奈津美は近寄ってきた旬に抱きついた。

ぶつかってくるように勢いよく、体重を預けるようにして抱きついてこられた旬は、よるめいて後ろに手をついたが、それでもしっかり奈津美を受けとめた。

「ナツ……？」

奈津美には見えなかったけれど、旬はきつと呆然として、戸惑っているだろう。

こんなことは、初めてだ。奈津美が泣いて、奈津美からこうやって旬を抱き締めたことなんて、ほとんどない。

「ナツ……どうした？」

旬はそつと奈津美の背中に手を回した。

旬も、どうしたらいいのかわからないというような、そんな戸惑いが、手から伝わってくる。

「旬……ごめん。ごめんね……」

酷い涙声で、奈津美はやつと旬に謝ることができた。

旬の首に回した腕に、ほんの少し力を入れた。すると、旬の匂いがした。

香水などではなく、所謂人の匂い……体臭だ。今まではあまり気が付かなかったし、特に意識もしていなかったけど、今日はとても強く感じられて、奈津美の心を落ち着かせてくれた。

そうすると、涙が止まらなくなった。奈津美は、ついに嗚咽を漏らしながら、泣きじゃくった。

「ふええ……しゅっ、旬……ごめ……ごめんなさ、い……ごめんなさい……」

奈津美は、まるで小さい子のように、大泣きしながら何度も旬の耳元で謝り続けた。

旬に対する、色々な思いを込めて……

「ナツ？ 何でナツが謝ってんの？ つうか、何でそんなに泣いてんの？」

旬は、こんなに大泣きする奈津美に、パニック状態だっただろう。それでも旬は、優しく奈津美の背中を撫でてくれていた。

「あつ、あたしも……不安……だった、の……」

さつきより酷い声になって、途切れ途切れになりながらも、奈津美は旬に自分の気持ちを話そうとした。

「あ、あたし……何でっ……旬が……あたし、と付き合っ……  
るのか、分かんなく、て……あたしはっ……旬、より……四つも上っ、  
だし……旬は……む、胸のおつきい人……好き、だから……それだけ  
しか、見てない、のかもって……思っ……たり、それに……ほ、本当  
に、旬は、あたしが、旬の身の回りのこと……全部してくれるから  
って、付き合ってるんじゃないかって、本当に、思ったの……旬  
は、あたしじゃなくても……いいんじゃないかって……あたしの  
代わりは、他にもいるんじゃないかって……そう思ったら、すごく  
……嫌だった」

何でそう思っていたのだろうと、今は思う。

旬は、いつでもどこでも、奈津美に対して気持ちをさらけ出して  
くれていた。ちゃんと好きだと言ってくれていた。

それなのに、あの居酒屋で旬の知り合いが叩いていた軽口の方を  
鵜呑みにして、消極的な奈津美自身の考えをそうだと思込んで……

初めから単純に、素直に、旬の言葉だけを信じていればよかった  
だけだ。

旬はこれを聞いて、どう思ったのだろう。流石に、少しは、奈津美に対して怒りを感じただろうか。ずっと、旬のことを、信じてなかったと言ったようなものなのだから……

でも旬は、奈津美の滅裂な言葉を黙って聞いていた。話している間は、ずっと奈津美の背中を優しく撫でてくれていた。

「ナツ……」

奈津美の背中を撫でていた旬の手の、もう片方が、奈津美の頭に触れた。

今度は奈津美の髪を撫でながら、旬が口を開いた。

「前にも言ったかもだけど、俺は……ナツだから、好きなんだよ。もし他に、ナツみたいにおっぱいでかい人がいても、家事全般ができるような人がいても、それがナツじゃないなら、絶対好きになんかならないよ」

耳元で、旬の優しい声が聞こえる。

それをもっとよく聞きたくて、奈津美は旬に頬を寄せた。

「ナツ……大好きだよ。俺はナツの全部が好き。ぎゅってすると柔らかくていい匂いがして、しっかり者で優しくて、たまに怒ったり、照れたり、笑ったり……今初めて見たけど、泣いてるところも。ナツの全部は、俺の中の一部なんだ。……だから、俺はナツがいないとダメなんだ」

旬は、ありのままの奈津美を受け入れて、好きだと言ってくれている。

今思えば、旬の前では、素の自分をさらけ出すことができていた。

そのことに、やっと気付いた。

「旬……あたしも」

奈津美は旬を抱き締める力を更に込めた。

「あたしも……旬のこと、大好きだよ……大好きだからね……！」

口にしてみて、とても新鮮で、変に照れくさくて、こうやってはつきりと伝えようとして旬に好きだと言ったのは初めてだと、改めて思い知った。

『 ……  
『 これじゃあ、あたしばっかりが旬のこと好きだけみたい…  
』』

そんなことをなかったのに……  
こんなんだったら、旬の方が不安に思って当たり前なのに。

「旬は……だらしなくて、いつも部屋行くと汚いし、エッチなことばっかしてくるし……本当は、あたしの理想とは全く違うけど…

……」  
さっきのお返しのように、奈津美は、旬に対して思っていたことを告げる。

それで出てくるのはやっぱり、あまりいいことではない。

「でも……それでも旬だから……旬だから好きだよ！ 旬じゃなかったら、一緒に居たいって……離れたくないって、思わないから……」

元はと言えば、勢いで付き合い始めた旬……  
何とかなるだろう。付き合っていけば、きっと好きになっていく

だろう。初めはそんな気持ちだった。

でも、いつの間にか、こんなにも旬のことが好きで、旬のことが愛しくて、奈津美にとってなくてはならない、側に居ることが当たり前前の存在になっていた。

「よかった……」

耳元で旬の安心しきった声を聞くと同時に、奈津美は旬に強く抱き締められた。

「よかった…… ナツが、俺のこと嫌いじゃなくて……」

それを聞くと、おさまりかけていた涙が再びこみ上げてきた。

「……つく……旬……」

「えっ……!?!? 何でそこで泣くの!?!?」

またもや慌てた様子の子の旬だったが、奈津美自身、何で涙が出るのかいまいち分からなかった。

でも、安心したような、嬉しいような……少なくとも、悲しみからの涙ではなかった。

「ナツ、泣きやめ?」

旬は、そっと抱き締めていた手を離し、両手で奈津美の頬を挟んで撫でる。

奈津美は顔を上げることが出来ずに、俯いたまま涙を流した。

「ナツ。俺、ナツは笑ってる時の方が好きだよ? だから、笑って?」

そう言いながら、旬は奈津美の顔を上向きにした。  
旬と目が合う。

「……………やっぱり泣いてるとこもめちゃくちゃ可愛い」  
笑顔になって旬は言った。

言ってることが変わりすぎて、奈津美はおかしくなって吹き出した。

「もっつ……………何言ってるの」  
久々の、奈津美の口癖だった。

「あ、やっぱりナツはそうじゃないとな」  
旬は奈津美の表情を見て、満足そうに笑った。

きつと、泣き笑いの変な顔になっていた。だろっけど、そんなことは気にならなかった。

指で目元を擦ると、落ちたマスカラとアイラインで黒くなった。

「メイク、落とさないと……………」  
奈津美は小さくそう言って旬の腕の中からそっと抜け出した。

旬に背を向けて、ティッシュで涙を拭いて、いつも使っているクレンジング用のウェットティッシュで落としていく。

手鏡で見してみると、思った以上に酷い顔をしている。

目元のメイクが落ちてパンダのようで、目は充血して兎のようだ。

これでさっきは泣いていたのだから、もっと酷い顔だっはずだ。

その顔を可愛いと言った旬は、やっぱり物好きだと思いつながら、

奈津美はメイクを落とした。

ぐるぎゆるるぅ〜……

匂の方からキテレツな音が聞こえ、奈津美は振り返った。

見ると匂は腹を押さえている。

「ハハツ……そう言えば俺、まだ晩飯食べてなかった。気が抜けたらつい鳴っちゃった」

恥ずかしそうに笑いながら、匂は言い訳した。

思わず奈津美も笑みを浮かべたが、匂が空腹なのは、奈津美が何時間も待たせてしまったせいだと気付いた。

「匂、何食べたい？ 出来るものならすぐ作るから」

お詫びとしてそのくらいのことはいしようとして、奈津美は体ごと匂の方に向いた。

「ん〜……じゃあ……」

匂はじつと奈津美を見ると、ニヤツと笑った。

「ナツ食べたいなあ……」

ほんの少し甘えを含んで匂が言った。

その次の瞬間には、奈津美の体が動いていた。

「……なーんて。……え？」

笑って冗談にしようとした匂の唇に奈津美の指が触れ、言葉を遮

る。

「ナ……ナツ？」

予想外の出来事に、旬は目を白黒させる。

奈津美も、まさか自分がこんなことをするなんて、思いもしていなかった。

奈津美は旬の顔に、お互いの呼吸がかかるほどに近付くと、

「いいよ。食べても……」

そう言って、旬の唇に自分の唇を合わせた。

奈津美からこんなに大胆なことをしたのは、初めでだ。きっと、自分も気付かないような本能で旬を求めていたのだ。

舌を忍ばせてみると、ほんのりとココアの味がした。それを少し味わって唇を離すと、旬は呆然としていた。

目が泳いでいて言葉を発するのも忘れてしまったかのように、固まっている。

まさか、引かれた？

あまりに大胆な行動をしすぎて、流石の旬も敬遠してしまったのではないかと、奈津美は不安になる。

「な、なんてねっ」

恥ずかしくて、そう笑って誤魔化そうとした。ちゃんと笑えているかは分からない。

「ごめん、なんかあるものですぐ作るね」

その場から逃げようとそう言っただけで奈津美は立ち上がった。

台所に行こうとした奈津美の手を旬が掴んだ。

「え………旬？」

旬は、真面目な顔で奈津美を見上げていた。

「ナツを食べる」

そう言われ奈津美は手を引っぱられ、旬の腕の中に収まった。

「いただきます」

耳元でそんな声が聞こえ、あとは、お互いに求め、求められ……

二人の愛が、より深まったことを知った一夜になった。

## 11 後日談

数日後

奈津美は、遅くはなったが、旬のためのバレンタインのチョコレートケーキを作り直して、旬の家にやってきた。

「……何これ」

旬の家に踏み込んだ時の奈津美の第一声はそれだった。

台詞としては、いつもと同じだったが、その声は、いつもより力が抜けていた。

いつもは啞然とした感じなのだが、今日はそれを通り越して愕然としていた。

「あ、ナツ」

旬が、玄関で立ち尽くしている奈津美を出迎えた。

「あ、それケーキ？」

奈津美の持っている紙袋を見て、反応する。

「うん」

奈津美はとりあえず頷いて旬に紙袋を渡す。

「うわ。開けていい？」

旬は上機嫌で紙袋の中のケーキの箱を覗いて言った。

「待って。旬。この部屋の状態は何？」

奈津美は、少し厳しい声で旬に聞いた。

「何でいつもよりこんなにひどいの？」

久々に来た旬の部屋の中は、いつもと違った。

いつもにも増して、散らかり、部屋がゴミや物で埋め尽くされていた。

久々、といっても、前に来て掃除した時から十日も経たないはずだ。今までにも二週間ほど来てない時はよくあったのだが、その時以上……というより、奈津美が見てきた中で一番酷い。

「えー。これでも掃除しようとして頑張ってたんだって」

「え……」

旬の言葉を聞き、奈津美は目を丸くする。

「俺だって、少しはナツに見直してほしいからさ……？」  
少し恥ずかしそうに、旬は言った。

「旬……」

いつもと少し違う旬を、奈津美は驚いた表情で見る。しかしすぐに真顔に戻って、

「何で掃除しようとしてこんなに酷くなるのよ。……もうっ」  
奈津美はパンプスを脱いで部屋に上がった。

「え……ナツ、ケーキは？」

「冷蔵庫に入れといて」

「え……」

「こんな中で食べれるわけないでしょ！ 掃除が先！」

奈津美に厳しく言われ、旬は残念そうに冷蔵庫へ向かった。

あれ以来、奈津美は今までと大して変わらず旬に接していた。

旬がありのままの自分を受け入れて、それを好きだと言ってくれるのなら、特に意識せず、自然体で振る舞おうと決めたのだ。

それにしても、部屋の中の有り様は本当に酷い。

どうしてこうまでなっているのかと、よくよく見てみると、いつもは散らかっている部屋には存在しない、大判のゴミ袋が点々とそこらにある。

それらは全部、中途半端にゴミを入れて放置してある。

「旬、何でこんなに袋を無駄使いしてるのよ。まだ入るのに勿体無いでしょ」

台所から戻ってきた旬に、奈津美は注意する。

「別に無駄使いしてるわけじゃないよ。分別してんの」  
意外にも、旬は平然と言い返してきた。

「ナツ、いつもゴミはちゃんと分別してって言うじゃん。だから分けてたの」

あの匂がそこまで考えてやっていたなんて驚いた。

「でも分別してたら途中でややこしくなってそんな状態に」

さらりと挫折したことも言ってしまった。匂らしい。匂らしくて、呆れる。

「もう……そんな言うほどややこしくはないでしょ。燃えるのと燃えないのと、空き缶、ペットボトルぐらいなんだから」

そう言いながら、奈津美はそこらに落ちているゴミ袋を拾い上げ、中身を見てみる。

「もー……早速空き缶とペットボトルが同じところに入ってる」

奈津美はペットボトルを取り出した。

「え〜。マジで?」

そんな風に言いながら、二人で掃除を始めた。

ゴミの分別とか、匂にしてはしっかりと考えていると思ったら、他のゴミ袋も色んなゴミが混ざっていて、大してできていないことがわかった。

…それでも、今までの匂と随分違うと気付いている。

「じつやって、旬も一緒に掃除をするのは初めてだし、部屋の中にあるゴミ箱が、いつもと違って満杯になっているのは、

『ゴミはゴミ箱に入れてっていつも言ってるでしょ！』

何度もそう言ってたのを、意識してだろう。

旬は旬なりに、奈津美のためを考えている。

今も燃えるゴミと燃えないゴミの区別がつかずに悩んでいるが、間違えていても、大目に見よう。

『俺だって、少しはナツに見直してほしいからさ……?』

旬がそう言ったことが、今は何より嬉しかったから……

「あ、ナツ」

いつの間にか、旬が奈津美の正面に回り込み、顔を覗き込んでいた。

「今日、俺があげた口紅つけてるでしょ」

旬はニイツと笑いながら、嬉しそうに言った。

「うん」

奈津美は半ば驚きながら頷いた。

目聡い。

確かに今日、旬に会うからと思って初めてその口紅を塗ってみた。

でも、旬が選んだという色は、奈津美がよく使う色とそんなに変わらない、淡いローズピンクだ。塗ってみてもいつもとそんなに変わらないから、気づかないだろうと思っていた。

それでも分かるのは、やっぱり旬だからだ。

「その口紅ってさ、落ちにくくていいって評判なんだって。知ってた？」

旬は得意気な顔をしてそう言った。

「うん。知ってる」

奈津美は頷いて答えた。

旬がくれた口紅は、CMでよく見るもので、旬の言うとおり、食事をしたりしても落ちないということをメインに宣伝している。

「もしかして、それで選んだの？」

奈津美には逆に、旬がそれを知っていたことの方が意外だった。

「うん」

旬は、更にニッコリと笑って頷き、そっと奈津美の顔に自分の顔を近づける。

「どうして？」

奈津美が首を傾げ、そう尋ねると、旬の顔がそっと近寄ってきた。

「これでナツといっぱいチューできる」

悪戯っぽい旬の言葉に、奈津美は目を丸くした。  
そしてすぐ、

「もっつ……」

と、いつもの口癖を言いながらもはにかんだ。

二人は目を合わせて笑い合い、そのまま唇を重ねた。

柏原奈津美の彼氏は、年下・高卒・フリーター。家事は一切できないし、部屋は散らかすのが得意な方だ。

奈津美がいないと、まともな生活はできないんじゃないか。  
そんなダメ男の旬。

それでも、奈津美には旬が必要な存在だ。

何だかんだで、こんなダメ男に依存していたのは奈津美の方かもしれない。

11 後日談(後書き)

最後まで読んで頂き、本当にありがとうございました。いかがでしたでしょうか？

感想など貰えたら嬉しいです。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6480b/>

---

ダメ男依存症候群

2008年11月7日08時39分発行